さよならアミヨさん、

ネット輿論に別れを告げるときがきた

2022年5月3日　九折空也　Quali, LOVE ENTERTAINMENT

ネット世論はあなたにとって「使えないもの」になった 1

すでに工作員アミヨさんを想定しないわけにいかない 1

ネット世論を担っているのは極小数派 2

ネット世論はプラットフォームに依存している 3

アミヨは「拡散の担い手」 4

「不毛」と「大切なもの」 6

不毛革命 8

不毛のかわいい子 9

整理 10

絶対的なこころと相対的なこころ 11

アミヨには「大切なもの」がない 13

整理2 15

アミヨの矛盾1．アミヨは「大切なもの」ではない 16

アミヨの矛盾2．アミヨの被差別はなくならなかった 17

アミヨの矛盾3．アミヨたちは互いに仲間ではない 20

アミヨの始まり 21

①徒党を組む 23

②かわいくする 23

③被害者になる 25

「思し召し」とこころの違い 30

絶対的なこころとは、また「大切なもの」とは 33

あなたに向けて、アミヨに向けて 34

初めに読んでもいい編集後記 38

ネット世論はあなたにとって「使えないもの」になった

輿論というのも大げさだが、他に言い方がない。輿論とは「世論」のもともとの言い方だ、多数の手でおみこしのように担がれた論のことを輿論と言った、「世論」と同じ意味だと捉えていい。

二〇二二年四月現在、ウェブ上でいろんな意見が飛び交っている。あちこちでレスバトルが生じ、あちこちでバズが生じ、あちこちで炎上が生じている。これらのすべてはネット世論という語で呼ぶしかないと思うが、これらネット世論はすべて、あなたにとって「使えないもの」になった。

なぜ使えないものかというと、けっきょくろくでもないからだ。

それがろくでもないものだということは、きっと多くの人がうすうす直観でわかっている。

とはいえ、ろくでもないものが席巻するということはしばしばあるし、われわれはろくでもないものに支配されないというわけでもない。

あなたはそれがろくでもないものだということを、内心で確かに知り、内心で確かに見切りをつけるべきだ。

そのために、冷静に理知的に、それがどのようにろくでもないものなのかを知っておく必要がある。

本稿はそうしたあなたの知見の一助となるべく書かれるものだ。どうかこの小文がわずかでもあなたの健やかなあるべき心身を助けるものになりますように。

この話の奥には、ある種の「革命」ということが用意されている。それはわれわれがもたらすこれからの革命ではなく、われわれのところに起こってしまった血なまぐさい革命のことだ。それが何なのかの説明はこのまま読み進めていけば明瞭にわかる。

ある種の「うらみ」のようなものから、復讐としての革命が為されてしまった。それが為されてしまったということに、いま現在のわれわれはきちんと気づけていない。

一部、説明のために、ネット世論を醸成・構築している勢力のことを、擬人化して「アミヨさん」と設定することにする。網がネット、世が輿論で「アミヨさん」だ。

わたしもあなたも、現代においてアミヨさんが——あるいはアミヨさん「たち」が——何をどのように言うか、どのように厭らしく言うか、どのように圧力をかけてくるものか、数々の事例を目撃したことによって知っている。

そうしたアミヨさんの専横は猖獗を極めているのが現在の事実ではあるが、これはけっきょくあなたの友人ではないし、あなたがアミヨさんから学ぶところはひとつとしてない。アミヨさんと肩を寄せ合うところもひとつとしてない。

ネット世論というひとつの時代は、現在も続きながら、その命としては終わってしまったと言える。

この先もその死骸がわれわれを脅迫し続けるだろうが、それでもそれはすでに死骸だ。それで本稿のサブタイトルは「さよならアミヨさん」とした。

すでに工作員アミヨさんを想定しないわけにいかない

そもそも、教育やら国防やら、文化やら芸術やら、ハラスメントやらセクシャリティやら、すべてについてネット世論を醸成・構築するアミヨさんたちがいるとして、そのアミヨさんたちがすべて中立で公正な無作為のアミヨさんと想定することが現時点で出来ない。陰謀論のムードに耽るのは馬鹿馬鹿しいことだが、一方で国家や諜報や人類の歴史というのは、「そんなバカな」みたいなことを本当にやってきているものだ。どのように考えればいいかというと、日本に「弱くなってほしい」と望む人々はたくさんいて、日本が思想として「バラバラになってほしい」と望む人々がいる、「停滞してほしい」「士気低下してほしい」「生産力を失ってほしい」と望む人々がいるのだ、そのことは現在東欧で起こっている戦争とプロパガンダ合戦を見ていたら誰にでも察せるところだろう。日本が強い国で思想的に一丸となり生産力を高く持ち続けるというようなことを、隣国は決してよろこばない。

二〇一六年、人工知能が書いた小説が文学賞の一次審査を通過している。それだって現在から六年前のことなのだから、そのときより人工知能は遥かに性能を向上させているだろう。ことし二〇二二年、ある文学賞では、人工知能にあらすじを書かせて、人工知能と共に執筆した小説が星新一賞という文学賞に入選を果たした。同賞ではすでに、応募される作品の４％が人工知能によって書かれているそうだ。

人類はこの人工知能の作文能力を、小説だの文学賞だのという、ふざけたことにのみ使うだろうか。

まして国家レベルの諜報で使おうというような人工知能の性能は、個人や小さな大学の研究室が使うそれの性能とは比較できないだろう。

何の証拠もないことだし、陰謀論に耽りこむことは無意味な空想だ。だからといって、世の中に陰謀が「ない」わけではないし、われわれがウェブ上で見かけるコメントやＳＮＳのツイートに「政治的な工作意図の入りこんだものはゼロです、すっきり完全にクリーンなものです」と断言するのも逆に根拠のなさすぎることだ。誰でも Amazon で商品を購入しようとするとき、その商品のレビュー欄がたどたどしいニセモノの日本語で埋め尽くされており、評価星の数値が露骨に工作されているのを見かけて笑うことにすでに慣れているはずだ。

一般的な証券会社だってすでに投資売買のタイミングに人工知能のアドバイスを導入しているのは常識的なことだし、あるいは若手のお笑い芸人が「ネタ」を作るのに、人工知能の発想を借りていたとしてそのことにあなたはそこまで驚くだろうか。

この中でアミヨさんだけ例外だとどうして言えよう。

もちろんひとつひとつの議題について鋭敏にその工作コメントが投下されているのかどうかは知らない。そうした端っこのことではなく、全体として日本のムードを惰弱にするように、腐敗させるように、沈滞させるように、混乱するように、行き詰まるように、非生産的にさせるように、争いあうように、無気力にさせるように、憂鬱にさせるように、硬直するように、弱気にさせるように、足の引っ張り合いをするように、という継続的な工作が為されるということは十分ありうるのではないだろうか。あくまで「仮に」と前置きして問題ないと思うが、わたしが対日本の諜報戦略担当だったとしたら、 "最低限" そのようなことは仕掛けようと思う。そのことが実体としてどのていどの効果をもたらすのかは明らかでないとしても、それはやっておいて損のないことなのだから。

諜報戦略を担当している者が、「特に何もしていません」「いちおうずーっと眺めてはいますけど」ということで業務に◎のボーナスがつくのであれば、世界はまったく平和で、その役職のポストは世界で一番気楽な仕事のものになるだろう。

二〇二一年の四月から十二月末まで、日本の領空付近に領空侵犯のおそれがある機影が現れ、防衛のために自衛隊機がスクランブル発進した回数は７８５回に上る。一か月あたり８７回、毎日３回ぐらいはスクランブル発進しているということだ。隣国は日本に「何もしていない」だろうか。

人工知能の可能性も含め、われわれが目撃しているネット世論の情勢は、すでにその土台と背後に、公正ならざる政治的工作の結果も見込まねばならない。われわれはまずその意味でとんでもないウソを毎日掴まされている可能性が大いにある。

あなたは無数に存在するアミヨさんのその本人をひとりだって直接確かめたことはないのだから。

（以降、本稿において陰謀を想定するという話は含みません、ここ限りです）

ネット世論を担っているのは

ある Youtuber の動画を参考にその数値をサンプルに採る。一か月前に投降された動画、その再生回数は約 440 万回。グッドボタン（サムアップ）が約 10 万カウント、コメント数は 5,000 件と表示されている。チャンネル登録者数が約 1000 万人となっている。

動画を観た回数が一回だけとも限らず、またその視聴回数がどのようにカウントされるのかは明確ではないが、仮に登録者数からイメージして、200 万人がこの動画を一人当たり約 2.2 回観たと仮定しよう。そうすると、視聴者のうちグッドボタンを押した人は 20 人に一人、コメントを書き込んだ

人は 400 人に一人という計算になる。なお動画の題材は、気楽なグルメ・食通のネタで、コメントを書き込むことに年齢や知識の障壁・偏差等はそんなに大きくはたらかないものと考えられる。実際にコメントの一例を引用してみると、「マジで旨そう、食べられないのがくやしい」という具合だ。

文部科学省の「学校基本調査」によると、小中学校の全校生徒数がだいたいその 400 人ぐらいだそうだ。つまり、小中学校の全校生徒が動画を視聴したとき、そこにコメントを書き込んでいる生徒は一名だけということになる。それは極めて少数派だと言っていいだろう。

あなたがパッと思いつく、あなたの親しい友人は、きっと 400 人 もいないだろうから、おおむね「あなたのすべての友人のうちに Youtube 動画を観てコメントを投下する人は一人もいないだろうね」と想定できる。

われわれは現代において、「誰でもネットを見ている」のだが、同時に、「誰もネットに書き込んではいない」という状況の中を暮らしているのだ。

ではわれわれはいったい誰の声・誰の発言を聞いているのだろうか。

全校生徒 400 人 のうち、 399 人は何をどう思っているのだろう？

<<われわれはウェブ上で多数派の意見のやりとりなどしていない>>、行き渡った通信端末からインタラクティブなマス・コミュニケーションが成り立っているというのは錯覚であり幻想にすぎない。われわれは引き続き、多くの人たちが本当にどう思っているかは「知りようもない」という中を生き続けている。

「みんなこう言っている」というような意見は実はどこにもないのだ。400 人に一人だけが思っていることの集積を真の「常識」と認めることはできない。

ネット世論はプラットフォームに依存している

無作為にひとつの Youtube 動画を観たとき、そのコメント欄には「がんばってください」「とてもいいお話が聞けました」「これからも楽しみにしています」「かっこいい！」と絶賛のコメントが並んでいることが少なからずある。だがその動画を「５ちゃんねる」などのスレッドに話題として投下すれば、スレッドに投降される書き込みは絶賛のそれではなくなる。具体的には文面が汚れるのでなるべく避けたいが、その動画に表示されているものすべてを基本的に侮辱する書き込みで満ちるはずだ。こうなると無作為に想定する「アミヨさん」の正体がわからなくなる。Youtube のアミヨさんは絶賛しているのに、５ちゃんねると「まとめサイト」のアミヨさんはそれを口汚く侮辱しているということになる。

同じ動画をツイッターに拡散したときも、ツイッター上のアミヨさんは別の傾向を見せる。半笑いのネタに溶かし込んだりすることが多くなる。これが、別のＳＮＳなら別のＳＮＳのテイストに変化する。フェイスブックやインスタグラムならいわゆる「意識高い系」のほうへアミヨさんは傾くだろう。さらにいえば、５ちゃんねるの内部でさえ、それぞれの「板」の「住民」たちによってそのアミヨさんの傾向は大きく変化する。

これではまったくわけがわからない。たとえば、誰か教育現場に立つ人による、教育論の言説があったとして、その言説に対して「アミヨ」の賛否と評価は、

Youtube アミヨ	◎
５ちゃんねるアミヨ	×
ツイッターアミヨ	△
フェイスブックアミヨ	○

というように分かれてしまう。

このように、アミヨは主体的なものとして存在してはおらず、それぞれのプラットフォームに依存するものとしてしか存在していない。

つまり、おうおうにして、Youtube においてすばらしいものが５ちゃんねるにおいては「ゴミ」であり、５ちゃんねるにおいてすばらしいものはインスタグラムにおいては「最低」ということになる。

あるいは、強引にネット世論というものを肯定しようとしても、それは Youtube 世論やら５ちゃんねる世論やらツイッター世論やらにそれぞれ分離して捉えねばならないということだ。まるで、公民館で投票するものとホテル会場で投票するものが変わってしまうというように。これではもう、人々が何をどう考えているかということの土台にある「主体性」という大前提じたいが成り立っていない。

問題点は先送りにするとして、さしあたりわれわれが知らねばならないことは、先の段で述べた 400 人に一人が、プラットフォームごとで「言うことがまったく違う」ということだ。するとこれらはもう、コメント欄や書き込みじたいは残っているものの、人々の「言うこと」じたいはどこにも残っていないということになる。そしてそのとおり、ネット世論を醸成・構築する一人となったその 400 人に一人の少数派は、その日の気分であちこちに自分の「言うこと」を書き残しただろうけれど、それがどのようなものであったか、どのような意図であったか、いちいち把握も記憶も統合もしていない。

そのときの自分の一声を、自分のひとつのシーン、ひとつの決断、ひとつの思い出、一つの選択として、己に刻んでいる者などいるわけがないのだ。これがおおよそネット世論の正体であって、つまりネット世論はそれぞれのプラットフォームと題材から「刺激」を受けた者が、その刺激に応じてそのとき限りの思い付きをそこに吐き出していくのみであって、その集積物をわれわれが尊重して「世論」などと扱うことはやはりできない。<<プラットフォームの刺激が人々に物を言わせているのであって、物を言う人々が集まってプラットフォームを出現させているのではない>>。<<各プラットフォームが人々を醸成したのであって、人々が各プラットフォームを醸成したのではない>>。

だからこそ Youtuber であり、ツイッタラーであり、「ねらー」なのだ。その主体性はプラットフォームの側にあって当人の側にはない。アミヨはそれぞれのプラットフォームの産物であって、プラットフォームなしにアミヨが主体として独立に存在しているわけではない。

大音量で音楽を流すナイト・クラブに人々を集めたら、人々はそれぞれ大声を上げたり、踊り狂ったりするかもしれないが、それはナイト・クラブの刺激の産物であって、彼らは単体で誰もいない砂浜に立っているときに踊り狂ったりはしない。それと同じように、すべてのアミヨはプラットフォームが除去されればその世論と一緒にまるごと消えてしまう。

われわれは十数年前まで、このことに強い違和感をもって、一種の警戒心をはたらかせていた。特に自分にとって誰というのでもない、プラットフォームの空気・ムードに押しつぶされてすべてが支配されていくということのいかがわしさに強い抵抗と否定を覚えていたのだ。ネットで大流行の○○というのを、世論やメインカルチャーの座に据えるのは直観的に "不自然" だと。ネットで大流行というのも、正確にはそれぞれのプラットフォームで大流行というのにすぎないし、それを絶賛するコメントというのも、400 人に一人しか発していないのに、それを権威と認めて首座に置くのは不自然なことだと。

この警戒心を、アミヨさんはどのように突破してゆき、自分の権勢を広げていったのだろうか。

アミヨは「拡散の担い手」

会社員、特に営業の者が、朝には経済新聞を読んで出かけるのは、営業先や来客に対して交わす会話の話題がたいてい新聞の一面記事だからだ、そういうお約束が会社員にはある（といっても、そのやり口もすでに古すぎ、今はなくなっているかもしれないけれども）。

かつてニュースは、世情を示すという向きも何割かはあったが、それ以上に情報として必要なことだったからこそ、それは報道された。たとえばＡ社が新規事業を発表した。Ｂ社はリストラクチャリングを発表した。Ｃ社は円安で価格管理に苦戦しており、Ｄ社はＥ社との事業合併を発表した。日々の天気予報だって必要な情報だし、高速道路○○線が事故で大規模な渋滞というのも必要な情報だ。小麦の価格変動や、米の不作、魚の不漁や豊漁も必要な情報だ。社会生産に関わ

って生きていくのにこれらの情報を知らないでは済まされない。

一方、アイドルグループの〇〇が、関係者からパワハラを受けて、そのことを告発したというようなことは、世情を示すひとつの「事件」ではあったとしても、それじたいは直接「必要」な情報ではない。食品メーカーの誰々が性差別に関わって不当な発言をしたというようなことも、たとえなげかわしい内容のものであったとしても、それじたい「必要」な情報ではない。

かつてニュースというのは、何であれ「必要」な情報ということが第一に優先された。現代においてはそのニュースの定義じたいが変わってしまい、騒がれやすいもの・それによって拡散されやすいものがニュースの第一になった。もちろん報道といってもＮＨＫ以外はスポンサーを抱えているものだから、商売として視聴率の獲得を第一義に支配されなくてはならないという由は誰にでもわかるとして、それでもそのことが露骨に支配的になった。

たとえば学習塾の経営陣が、現場レベルの従業員に、ひどいパワハラ、ひどい恫喝をしたとする。そのことには被害者がいるのだから、録音など証拠が取れたなら不幸中の幸い、裁判によって正当な処分が下るべきだろう。

だが今、その録音の音源があるとすると、その録音の音源に対して猟奇的な関心から、その音源をたっぷり報道して視聴者に聞かせるのがまるでニュースというような様相になっている。一方で、〇〇市で二名が殺害される殺人事件があったとして、それが怨恨によるものだったとして、そのニュースは三十秒ほどで済まされていく。学習塾の経営者の音源は一分間流され、その経営者の経歴や、その著書と発言、若いころの写真まで報道される。これは猟奇的な関心から視聴者を「惹きつける」という意図に過ぎず、すでに必要な情報を報せるという報道の第一義からはるかに逸脱してしまっている。

ここであなたが、その恫喝音源を聞かされたとして、あなたはどう思うだろうか。もちろんまずはその汚らしい声にウワッと嫌悪が走るだろう。そして、「パワハラというのは本当に最低だな」と思うかもしれない。けれどもだからといって、そこからそのパワハラに関わって言説をツイートしようとはしないだろうし、その言説を誰かと交換して確かめ合おうなどと考えない。単純な話、あなたはきっとそこまで暇ではないからだ。ましてそこから、その恫喝がどのような事情から発生したものか、それぞれが加害者と被害者であるとどこまで断定してよいか、そして今後その両者にどのような処分が下されていくか、そのことまで追跡していたら、簡単に一時間や二時間は経ってしまう。おそらくあなたの日々に、そんなことに費やしている時間は有り余ってはいないはずだ。

つまり単純な話、かなり無念なことと言わざるをえないと思うが、「必要な情報」というのではなくただ関心を惹く材料が豊かな事件を、ただ拡散してもらうためだけに報道し、またそれを拡散するだけ不毛な時間を有り余らせている人たちが、このことの主たる担い手になっているということだ。ふつうわれわれは必要な情報を授受するだけでそれなりに手一杯なところ、そうではない人たちも存在しており、現代の話題のすべてはそうした人たちによって間接的に担われているということ。身も蓋もない言い方をするならば、視聴率が欲しいメディアが、不毛な時間を有り余らせている人々を「使役」しているというのが現代の状況だ。かつてそうした不毛な人々には "使い道" がなかった。それが今は違う、今はそうした人々を「拡散の担い手」として使役することができてしまう。誰かがそのようにデザインしたわけではないだろうが、結果的にそのような状況が露骨に形成されてしまって、われわれの直接よく知っているこの現代の形が出来上がっている。

ウェブ上にさまざまなプラットフォームが出現したとして、そのプラットフォームごとに言うことの異なるアミヨさんは、やはりまったくアテにならない存在だ。にも関わらず、それが世の中に幅を利かせていったのはどういう由縁だったか。それはアミヨさんたちが、「拡散しますよ」という担い手を買って出るということだった。

実際、テレビ局が持つ Youtube 上のニュースチャンネルを見ると、たとえばチャンネル登録者数が 250 万人に対し、「人気のアップロード動画」では、再生数が 500 万 〜 2500 万に及んでいるものがある。これらの動画は、拡散によって「バズった」とみなしてよいだろう。報道だってこのように「バズらせたい」と望む——それを通してチャンネル登録者数を増やしたいと望む——からには、そのバズの担い手に向けたアプローチが必要になってくるということだ。

アミヨは自分たちの言説によってその権勢を広げていったのではない。もし真正面から言説だけで権勢を得ていこうとするならば、出版社を設立して雑誌を発行したり、政党を結

成して出馬したりということになるはずだが、アミヨたちにそうした動きはまったくない。

アミヨは「拡散の担い手」としてその権勢を広げていった。実際、どのニュースをリツイートし、どの事件でスレッドを建てるか、どのスレッドに「勢い」を与えるかは、完全に彼らのお気持ちひとつなのだから、バズに関しては彼らの好みに迎合していくよりなく、彼らはその権力を確かに手中にしていると言える。<<かつては使い道がなかった、不毛な時間を有り余らせている人々に、今は集団的にひとつの権力が具わった>>ということだ。

アミヨは言説の方向性をもってその世論めいたものを醸成しているのではない。拡散の規模じたいがアミヨの情勢する世論めいたものだ。<<言説の内容や思想があるわけではなく、ただ拡散の規模だけがある>>。それぞれをどの程度の規模で拡散させるかは、彼らの意図で決定できるわけではないが、彼らの気持ちひとつで決定していく。

では彼らが、どのような気持ちでその「拡散」を担っているかということが、ネット世論そのものの方向性を決定することになる。アミヨの気持ちに反するものは拡散規模を得ないし、アミヨの気持ちに即するものは拡散規模を得る。アミヨに言説の思想があるわけではない。アミヨにあるものは無念ながら「不毛」な時間だ。

「不毛」と「大切なもの」

アミヨには不毛な時間があり、大切なものがない。もし大切なものがあったとすると、彼らの時間と労力はその大切なものに向けて費やされてしまうはずで、「拡散の担い手」をやっている余力はなくなるはずだ。アミヨの多くはそれぞれ何かを「それなりに」をやっているには違いないが、ひたむきにそれじたいが満ちるという本質的に「大切なもの」を持ってはいない。それでは彼らの気持ちはどの方向へ向かうか。彼らの気持ちは、大切なものの否定に向かい、すべての人が不毛であれ、という望みに向かう。

たとえば近年、悪質な「煽り運転」の事件が、その映像と音声と共に報道され、その映像と音声が猟奇性において拡散されていった。その拡散規模は典型的なネット世論を醸成し、その結果、煽り運転は法律において厳罰化されることになった。

むろん煽り運転の厳罰化について、わたしが異議を唱えるものではない。わたしは煽り運転をしたがるような気質の者ではないし、煽り運転のおぞましい粗暴さと不穏に過剰な情状酌量を覚える心当たりはわたしの内にない。

ただ、煽り運転が今こうして誰でも知っているネット世論の典型になった理由の最大は、単にその煽り運転が「不毛」という一点による。つまり、「不毛だからバズった」ということだ。映像も音声もおぞましく猟奇性を刺激するもので、それらの総体がまるごと「不毛」だ。だからこそバズった。さらに、ここに煽り運転の厳罰化という結果がもたらされると、アミヨさんの気持ちにおいてはそれがどのように受け取られるかというと、「煽り運転という不毛なことをした者は、厳罰を食らって財産や立場を失い、ますます人生を不毛にする」という文脈で受け取られる。そのことが、「不毛」を拠点とするアミヨさんにとっては思わずニンマリする満悦の心地を催させるのだ。この満悦の心地は一般に、アミヨさん側において「勝利」あるいは「大勝利」などと揶揄されて捉えられる。

わかりやすさのために典型的な「事件」をサンプルにしたけれども、これは事件ではないただの "物事" のすべてに引き当てられる。たとえば教育をテーマにおいたとして、教育現場において最低限の体罰は是か非か、というようなことがしばしば考えられる。このことについてアミヨは、

「体罰を発想する奴じたいに体罰をくれてやるべき、そしたら自分の言っていることがどういうことかわかるだろ」

「体罰したけりゃ、体罰したあとでその教師が暴行罪で逮捕されればいいじゃん。その覚悟がないなら体罰はすべきじゃないんじゃね」

「まーた昭和脳の老害が出しゃばってんのか」

「教育する能力がないから体罰に頼ろうとするんだろ、プロ失格」

という口ぶりを示す。これらのアミヨの言いようにわれわれはすでに慣れ切っているので、このことにいまさら驚くべき点はない。

では一方で、

「体罰は一切必要なし！　褒めて伸ばす教育がすべてを決める」

というようなキャッチフレーズがあると、とりあえずは、
「けっきょくそれに尽きる」
とはいったん応えるものの、直後には、
「でも口で言ってもどうしてもわからん奴っているけれどね」
「褒めるところがまったくない子はどうすればいいんですかね」
「褒めるのはけっこうだけど、それで子の側が伸びなきゃいけない義理はないでしょ。そういう期待の押し付けはマジでうざい」
「褒められて伸びるようになるのは一定の年齢になってからだよ、躾（しつけ）のレベルは体で教えるしかない。褒めて伸ばすとか言っている奴はたいてい無責任で自分がトラブルを負いたくないだけ」
と言い出す。
このように、けっきょくどんな言説が示されようとも、それに対して「マウント」を取るのが第一のことであって、そのやりとりの向こうに何らの思想も描いてはいないということ、このこともすでに現代のわれわれにとって飽きるほど知られていることなので、やはり驚くべき点はない。
本稿がここで提出するのは、このマウント主義について、そのマウントは単に類人猿的な本能から生じているのみならず、<<「不毛」をもって「大切なもの」をマウントする>>ということが本意にあるものだということだ。もちろんその当事者たるアミヨたちは、いちいちそのように精密に自覚しているわけではない。彼らはただ底に沈殿して湧きだし続ける衝動に従っているのみだが、その沈殿しているものこそが、この「不毛」と「大切なもの」に関わる "うらみ" のようなものだということになる。
アミヨたちが主張し、また活動しているその方向性は、たとえばこのように教育うんぬんをテーマにしたとき、その教育ということに<<大切なものはない>>ということを成り立たせんためだ。彼らにとって、教育うんぬんに関わってそこに「大切なものがある」という前提自体が許せず、容れられぬものだ。だから彼らの活動とそのネット世論はすべて、そこにある「大切なもの」が否定される方向にのみはたらく。
アミヨたちは「不毛」を拠点に生じている者たちであり、「大切なもの」を何一つ与えられずに来たものたちだ。
だから、他の一切のことは実はどうでもよく、すべてのものを「不毛」にする、「大切なもの」の一切を否定する、ということを真の目的にしている。
たとえばテーマを教育から国防に移してみよう。
「国を守るために死ぬ兵士とかバカでしょ。自分が死んだらおしまいじゃん」
「国を守るために死ねない兵士とかバカでしょ。死ぬことも含めての仕事じゃん」
アミヨたちは両方を言う。
だからアミヨたちの言説には思想がない。
アミヨたちはただ、国防というテーマにおいても、そこに「大切なもの」はないという一方向にはたらき続けるのみだ。彼らはただ、「国を守って死ぬ兵士は不毛」「国を守るのに死ねない兵士は不毛」と言いたいのみ。
他の一般的な仕事に対してもそうだし、学門に対してもそう、恋あいに対してもそうだし、文化・芸術に対してもそう。スポーツ選手は「そのスポーツのことしか知らないバカだから未来がない」し、同時に、「そのスポーツのことだけに打ち込めなかったタレントまがいのスポーツ選手は、選手というよりただのヨゴレ芸人」でもある。演技力がないのに映画に出ているアイドルは「伸びしろがなくて必死」と言われ、一方、演技力とかどうでもいいことで業界に居座っている者はすべて「老害」だと言われる。学門は生きる上で何の役にも立たない無価値なもので、一方、まともに学門を修めていない人は根本的に知性がゴミだという。仕事に熱心で職務をやりきろうとする人は気の毒な社畜であって、自分の仕事をやりきろうという熱意がない奴は仕事を辞めたほうがいいクズだという。好きな人と結婚したってどうせ数年でお互いうんざりしだすからバカだし、好きでない人と結婚したらけっきょく地獄でしかないからバカだ、そして結婚しなければけっきょく負け組だし、結婚したらそれじたいが墓場で負け組だ。言説それじたいに思想や方向性はまったくなく、ただマウントを取るだけ、しかもそのマウントは、「不毛」をもって「大切なもの」のすべてを否定しきりたいという動機からのみ生じている。
マウントの果てに、「自分はお前らより上位だ」「なぜなら自分のほうが、お前らより大切なものを持っているからだ」と、アミヨたちは言いたいのではない。アミヨたちはその「大切なもの」という概念そのものを否定したいのだ。なぜなら自分にはその現象じたいが与えられなかったから。彼

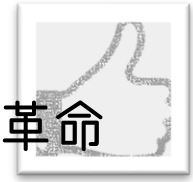
らにとって青春は幻想であり、また、青春時代を満喫できなかった人はけっきょく生涯を通して負け組でしかない。

アミヨのメカニズムはこの一点、「大切なもの」の否定、「不毛」の隆盛、これのみに掛かっている。

このことは社会現象でありながら、それ以上にあなた自身に降りかかってくる直接の災難でもある。なぜならば、「アミヨ」は、必ず三秒後にでもあなたに突っかかってくるからだ。あなたが「大切なもの」を抱えて進もうとすれば、その三センチメートル先にはもう彼らが大群で待ち受けている。

あなたの「大切なもの」を、概念ごと完全に破壊・否定するのがアミヨたちの意思だ。

このことは、すでに成された革命であって、名付けるとすれば必然、これは「不毛革命」ということになる。



不毛革命

「革命」というのがどういうものか、あなたはどのように学校で習っただろうか。学校ではおそらくこのことを本質に及んでまでは教えない。それは、とうてい穏健なムードの中で教えきれるものではないからだ。もし「革命」ということの本質を生徒に教えれば、明晰な生徒は教師にただちにこう問うだろう、

「つまり先生、革命というのは、僕たち生徒があなたがた教師をことごとく殺害することですか？」

このことについて教師は、そうです、と肯うよりないのだ。革命の是非はともかくとして、革命というのはただそのことを指している。だからこそ学校では革命の単純な意味は教えられない。

革命というのは、学校でイメージさせられるややこしいことではまったくなく、極めてシンプルに、これまでのものを"根絶やし" にするということだ。代表的にいうと、あなたがその手に凶器をもって、あなたの両親を殺害するということだ。これは極論を言っているのではなく、たとえば毛沢東はその革命論を明確に「暴力革命」と示したことはよく知られていることだし、革命に関わってポル・ポトの言いようが象徴的によく知られている、子供たちに向けられたポル・ポトからの指令文面はこうであった、<<「たとえ親であっても、社会の毒と思えば微笑んで殺せ」>>。

なぜ革命において、あなたは両親を殺すのか。このことの答えもシンプルで、「殺せば両親がいなくなるから」だ。もちろんあなた個人がそれをしても革命は成されないが、人々が一斉にそのようにすれば革命が為される。それが正しいかどうかというようなことはさておき、人々が一斉にそのようにやりだし、その数が膨張していくようでは、それを差し止める実効的な力がない。

のみならず、周囲に学校があれば学校を破壊し、神社があれば神社を破壊する。仏壇があれば仏壇を破壊するし、教会があれば教会を破壊する。なぜ破壊するかというと、「破壊すればそれはなくなるから」だ。破壊してしまえばそれはもう更地になり、なくなったそれについて考える必要はなくなる。すべてをゼロから考えることができる。革命とはそのように、これまでにあったものを「変形」するのではなく、更地にしてしまって、そこに新しい理念を植えてみようとする、実効的な行動を指す語だ。フランス革命はフランスに民主主義をもたらしたものを指すのではなく、ただ王族をギロチンに掛けたことじたいをフランス革命と呼ぶ。古いものが残っているうちは革命ではないし、古いものの一切がなくなればそれじたいが「革命」だ。暴徒たちがルイ十六世をギロチンに掛け、その後何事もなかったように帰宅したとしても、それは革命と言いうる。新しい理念や制度がもたられさることは革命以後のことであって、革命そのものには新しい理念も制度もない。

ＩＴ革命によって mp3 が普及すると、カセットテープは "根絶やし" にされた。製品としては残っているが、それは歴史的遺物として残っているにすぎない。都心部に自動車が普及すると荷役としての馬は根絶やしにされた。デジタルカメラが普及してフィルムカメラは根絶やしにされた、残っているのはほとんど骨董品しかない。ことの是非の以前に、人の営為にはそうして "根絶やしにする" というプロセスがしばしばありうるということだ。古いもの・抵抗するものを根絶やしにすればいやおうなく新しいものが席巻するのだから、そうするべきじゃないかということ、また「そうするしかないじゃないか」ということ、それが「革命」という発想だ。いかなる国でもこうした発想を持つ勢力がどこかに潜伏して膨張してはいないかと、公安や秘密警察が目を光らせている。

アミヨは「大切なもの」を根絶やしにしていった。かつて、資本をもたない人々が資本を持つ人々を根絶やしにしていった革命があったように、「大切なもの」という現象を持

たない人が、「大切なもの」という現象を持つ人々を根絶やしにしていく革命が起こった。このことはやはり「不毛革命」と呼ばれるべきだ。

資本をもたざる労働者階級が、資本によって労働力を搾取する資本家に嫉妬し、さらには恨むとき、そこに起こる革命の動力をルサンチマンと呼ぶことがある。それと同じように、「大切なもの」という現象を与えられなかった人は、それを与えられてある人々にルサンチマンを向け、この不毛革命を成し遂げた。この革命以後にある現代において、たとえば「陽キャ」は不毛でなくてはならず、「陰キャ」も不毛でなくてはならない。金持ちがうらやましい生活をしていたとしても、そのうらやましい生活は不毛でなくてはならず、お金のない人がきつい生活をしていたとしても、その同情すべき暮らしは不毛でなくてはならない。女は男の不毛な“性欲処理玩具”でなくてはならず、男は女の不毛な“現金供給機”でなくてはならない（実際にはもっとひどい表現がされる）。目標を達成しようとする人は人間性のないサイコパスでなくてはならない。旧時代から愛され続けている人は不毛なオワコンの老害でなくてはならない。うまく友人を得られない若者は、自分と向き合うときというような「大切なもの」を持つものであってはならず、不毛な「ぼっち」でなくてはならない。うまく友人を得られる若者は、語り明かすというような「大切なもの」を持つものであってはならず、不毛な「コミュ力」の者でなくてはならない。そしてすべての浮き沈みには、「何ら大切なもの」はなく、すべてはどうしようもない考えるだけ不毛な「親ガチャ」でなくてはならない。

このようにして、「大切なもの」の一切が根絶やしにされることで不毛革命が成されたのだが、そのことを認めつつもわたしは、その革命に与しなかったことを明言しておきたい。そう言い立てたとて無力さが涙ぐましくみじめなことに過ぎないとしても、なおわたしはこの革命に与しなかったことを言い張り続けよう。また、その革命以降としての現代のすべてについても、わたしはけっきょく肯定しない者だと正直に告白しておこう。これはわたしが年齢的に、新しい時代を生きられぬ老いぼれというだけのことなのかもしれないし、そのように受け取られたとしてそのことを否定する意欲を今さらわたしは持ちえない。ただわたし自身思うのは、この革命以降の現代は「新しい時代ではない」ということなのだ。今になって、過去の革命がひょっとしたら一種「血迷っただけ」ということもあるのかもしれないと思える以上、この不毛革命も、ひょっとしたら後にはただ「血迷っただけ」ということに再定義されるのかもしれないのだから、わたしはこの現代が新しい時代ではなく血迷っている真っ最中にあるにすぎないという一縷の望みに賭けてみることにするのだ。わたしはなおも、「大切なもの」こそが「不毛」を根絶やしにするのではないかという古い可能性に依拠し続けよう。

不毛のかわいい子

不毛革命以降、「大切なもの」というのは概念ごと破壊されて消失したのだが、たとえ「大切なもの」でなくても、楽しみそのものが無いわけではない。つまり娯楽のすべては不毛革命以降も残るということになるが、その中で特に、現代における「かわいい」という語に焦点を当てておきたい。たとえば、不毛革命がすでに成されたという前提においては、男性にとってすでに女性は“大切なもの”ではありえないわけだが、それでも生理的欲求としての性欲は残る。「大切なもの」ではない対象に対して性的興奮と陶酔をするというのは実際の行為として整合しづらい。そこで「かわいい」という概念が台頭してくる。現代でいう「かわいい」というのは、「大切なものではまったくないが、かわいい」という意味で使われている。アイドルタレントおよびその類似として人々に知られるようになる女性たちは皆はっきりと「かわいい」が、かといってその中の誰が突然死んだとして、そのことを巨大な喪失として悲嘆に崩れ落ちるという人はいない。このように、「大切なもの」を根絶やしにした中で、その生理的性欲を「かわいい」に結びつけて陶酔するのが現代の主流だ。それが「かわいい」ということおよび、そのことに対して起こる陶酔と神経の惰弱化は強力なものだ。その作用の大なるについては虚偽がない。それに関わってはヨダレも涙も流すだろう。ただしそれでもその「かわいい」は、「大切なものではまったくないが、かわいい」という文脈で必ず使われている。「エロい」も同様で、「大切なものではまったく

ないが、性衝動を誘われてたまらない」という神経の惰弱化のことを現代では「エロい」と表現している。

大量の女の子がキャラクターとして出現するアニメも、あるいは女の子だけでなくジャンルとしては少年マンガとして登場するキャラクターたちも、あるいはソーシャルゲームのたぐいも、すべて「大切なものではまったくないが、かわいい、エロい、派手で刺激的、エモい」という形で描かれている。それがきっちりと不毛なものという土台で描かれていて初めて、それはアミヨたちに拡散してもらえる。またそうしたアニメやマンガやゲームだけでなく、実生活に体験することも不毛であることがこの革命以降の現代で善きものとして拡散の名誉を受ける。不毛な趣味、不毛な旅行、不毛な交友関係、不毛なサークル活動。不毛なグルメ、不毛な知識、不毛なフェス、不毛な舞台、不毛なスピリチュアル、不毛なマインドフルネス。不毛な散財、不毛な貴族趣味。Youtuber が激辛百倍やきそばを「食べてみた」と映像レポートするのも、それがわかりやすく「不毛」だからということで、現代の安心の“お墨付き”をもらっているということになる。不毛な筋力トレーニングでニコニコしている人が現代人はとても好きだ。

いかなる革命においても、革命以降は典型的なその「革命以降の子」が可愛がられるのが必定だから、不毛革命以降の現代においては、全力でその「不毛の子」をやっている者が革命以降の子としてかわいがられることになる。これは「不毛のかわいい子」と一般化して定義してよい。われわれはもし、美人の女の子が友人と「大切なもの」を通い合わせている気配を目撃したならば、その美人の女の子を決して可愛がらない。そうではなく、不毛の子として、

「土曜日は、一日中寝ていました。えへへ……それで今日は、ちょっと服装に、コスプレを効かせてみました。どうでしょう、似合っているでしょうか〜。わたしどうしたんでしょうね、こんなことをやっているような年齢ではないのに。みなさんも、楽しい一日をお過ごしくださいね」

というようなことを明らかにしているのが好きだ。われわれはそうしたものが好きだが、わたしは正直に、そうしたものをわたし自身は本当は好いてはいないと自白しておく。わたしは、そうして「かわいい」子が、その実「大切なもの」を一切持ち合わせていないということが、直接の肌身に触れたときどれだけ恐ろしいものかよく知っているからだ。

現代は革命以降の、不毛の子を可愛がる。不毛だからかわいいと感じ、可愛がるのであって、万が一「大切なもの」を真にその手にしようとするなら、人々は一斉にその子に容赦のない攻撃を始めるだろう。彼女のすべてが不毛になればよいという容赦のない攻撃を仕掛ける。それで彼女が「すべてが不毛になりました」と軍門に降り、慈悲を求めるとき、人々は彼女に屈託のない笑顔を向ける。

不毛のかわいい子は、この世の中をどのような原動力で生きていけばいいのか。先ほどの「服装にコスプレを効かせてみた子」は、実際にどのような原動力で、その溌剌としたふうの日々と、表情と振る舞いのパフォーマンスを続けているのだろう。

このことは必ず知っておかねばならない、そうでなければ最後の最後であなたの精神は正気を失ってしまうだろう。その本当のものに触れたとき、それが肌身に直接どれほど恐ろしいものか、わたしはすでに知っているし、あなたもいずれ知るときが来てしまうかもしれない。

「不毛」の世の中と「かわいい」の強力さの中で、彼女は「自分がかわいい」という強烈な原動力で生きている。不毛革命以降の現代はすべてが「不毛」で塗りつぶされ、「かわいい」だけが台頭している。その「かわいい」は、外向的に生じるのみではない、自分自身に内向的にも生じる。大切なものを持たない人も、大切なものを許さない人も、アミヨのすべても、言わないだけで「自分がかわいい」という強烈な原動力で生きている。自分に「大切なもの」がなくても、自分が「不毛」であっても、自分が「かわいい」ということはまったく別に容赦なくはたらき続ける。

つまりあるとき突然このように思い知ることがありうるわけだ、

「あの人は本当に自分がかわいいだけなんだ」

「わたしは本当に自分がかわいいだけなんだ」

あなたはこのとき、革命前の「大切なもの」へ帰る手続きを知っていなくてはならない。

整理

さして難解でもなければ複雑でもない話だが、ここまでのことを整理する。大げさに言えば「ネット世論」と呼ぶべき

ものが、すでに現在のわれわれを支配するに及んでいる。ただしこのネット世論の情勢には潜在的敵国からの破壊工作が含まれているかもしれない。そしてその破壊工作が含まれていなかったとしても、ネット世論を醸成しているのは人口の割合として極少数派だった。極少数派の上に、そのネット世論はプラットフォームに依存して吐き出されているだけで何の方向性もないものに過ぎなかった。にも関わらず、その方向性のない極少数派はあたかも世論の主流であるかのように振る舞う権勢を得た。その権勢はどのようにして得られたのだったか。情報を「拡散する担い手」として全体の構造に食い込んでいくことによって権勢を得た。他の人々は彼らアミヨのように有り余る不毛な時間を持っていない。かつては、この有り余る不毛な時間を持つ人の使い道は "なかった" のだが、こんにちにおいて「拡散の担い手」という使役の仕方がテクノロジー状況から生じた。こうして彼らの全体はあたかも「拡散審議委員会」のように猟奇性をもってはたらいたわけだが、彼らは自らその不毛さを拠点にしているがため、彼らが拡散するものは「不毛なもの」に必然的に偏った。不毛にこそ拡散規模を与え、不毛の反対側にある「大切なもの」に拡散規模を与えることは決してなかった。彼らのこのはたらきは「大切なもの」を根絶やしにする方向へ当然はたらいた。この根絶やし活動はつまり革命であった。これは不毛革命と呼ぶべきだ。不毛革命以降の現代にわれわれは生きており、われわれは「大切なものを持たない」「不毛な」子をのみ「かわいい」「エロい」などの表現で可愛がる。不毛のかわいい子をその不毛さにおいてのみ可愛がるというのが現代の真相だ。これらのことは、もしあなたが「大切なもの」を得よう・持とう・触れようとしたときに必ず襲い掛かってくる。そのときあなたは容赦のない攻撃を仕掛けられ、その攻撃はあなたが「すべてが不毛になりました」と軍門に降るときまで止むことがない。<<「大切なもの」を絶対に許さない>>。そういう秘密警察と村人たちに監視されながらわれわれは現代を生きている。

もともとネット世論を醸成していたアミヨは 400 人に一人という極少数派だった。続いて残る 399 人について考えようと思う。399 人は、アミヨではないから "無事" なのだろうか。そう思えたら安心なのだが、残念ながら事実はそうではない。残る 399 人もやはり、「大切なもの」はその現象ごと失った人々として存在している。そのことを説明していく。

ともあれ、つくづく思うのは、もうこのネット世論というものがまったく使えないということだ。「大切なもの」を一切持たない人々の世論などまともに尊重できるわけがない。わたしはわたしの側が血迷っているのだとは考えずにこの話を冷静に書き進めているつもりだ。

絶対的なこころと相対的なこころ

魂、という言い方をいったん控えるならば、「こころ」が問題になる。「大切なもの」をこころが捉える・こころが信じるとして、「大切なもの」の側が消えてなくなれば、そのこころはどうなるか。当然、こころはその「大切なもの」を失う。結果、399 人は、アミヨと同じく「大切なもの」をその現象ごと失い、不毛にのみ依拠する者たちとならざるを得なかった。<<こころを失ったわけではないが、こころの向かう対象を失った>>。これを巻き込まれた者の不幸と呼ぶべきか、受動的だった者としてやむをえない妥当な行先と捉えるかは悩ましいところだ。とはいえ、そのどちらであったとしても現在の状況は変わらないのだから、そのどちらだと決定することも必要ないとわたしは思う。

いやいや、こころは「大切なもの」を信じたのだから、それを失うことはない、と考える向きもあるだろうか。このことは一面としては真実なのだが、別の一面としては残念ながらそうではないと言わざるを得ない。

不毛革命によって世の中に「大切なもの」は根絶やしにされてしまったのだから、根絶やしにされて消失してしまったそれをなおも捉え続け・信じ続けるというそのこころは「絶対的なこころ」となる。相対的なこころはそうはいかない。

相対的なこころは、

「大切なものが、あったときには、それを捉えて、それを信じていたけれど、大切なものがなくなってしまった今は、それを失うしかないよ、なくなってしまったものを信じるなんてどうやってやるんだよ」

ということになる。

「大切なもの」うんぬんについて、それを絶対的なこころで捉え・信じ・掴んでいた人は別だ、今もなお「大切なもの」

をそのこころが捉えているかもしれないけれど、この絶対的なこころに及んだ人というのはかなりのていど特殊な人で、ちょっとわれわれの一般的な範疇にない。たとえるならば、戦争中は誰しもやむを得ず戦うだろうけれど、戦争が終わってもなおそのこころが戦い続けるという人はちょっと特殊だ。戦場の只中で共栄のこころを持ち続ける人が特殊であるのと同様に、戦争が終わってからもなおそのこころが戦い続ける人は特殊だ。それは「絶対的なこころ」と呼ぶべきで、「相対的なこころ」とは区別されるべきだ。そしてわれわれの大半は相対的なこころしか持っていない。だからこそ、数年前に流行したものに今年にはすっかり興味を失っているし、今はまったく興味がないものでも二か月後に流行し始めると「どれどれ」と関心が向いてしまう。激しい恋愛感情で交際した二人が、三か月後にはお互いにウンザリして嫌悪しあって別れるというようなことがいくらでもありふれるわれわれにおいて、安易に「絶対的なこころがあります」と言い張れば客観的には失笑を受けるだろう。

いかなる革命においても、実際にその手に武器を持ち、火矢と石つぶてを直接放ったという人は全体のうち極少数派だろう。けれども革命以降は、やはりほぼすべての人がその革命以降の子として生きざるを得ない。この不毛革命についても、ほとんどの人は直接ネット世論を醸成するアミヨの当事者ではなかっただろうけれど、けっきょくは革命が成し遂げられた以降の不毛連邦の最高議会に恭順する者とならざるを得ない。古い世代は誰でも記憶のどこかに「かつては "大切なもの" があったような気がする」というおぼろげな感触を残しているだろうけれど、それをもって彼らが大切なものの「残党」ということにはならない。「残党」はこのとき、革命以降の世の中において "掃討" の対象なのだから。

かつて「大切なもの」があったときは、その「大切なもの」を背後において、エネルギーの有り余る者が、歌を唄ったり映画を撮ったり漫才をしたりしていた。街角に色んな「場所」を形成していた。そして誰でも知るように、現代のそれは旧時代のそれとは違う。現代においては、明らかにそれが不毛だという前提でやけっぱちな歌声が発され、不毛だという前提で映画が投げやりに撮られ、不毛だと明らかにわかるキャラクターで漫才師がコンクールに出ており、街角は商売しかしていない。そしてそれらが不毛だという前提だからこそ、アミヨたちはそれを快く拡散してくれるという構図だ。相対的なこころは、それらが拡散され善いものと扱われて称揚されるなら、その称揚に追随するしかない。絶対的にはまったく面白くないことが明らかな映画でも、現代を生きる相対的なこころはそれを「よかったよね」「マジ名作」「映画史を塗り替えた」と称揚しなくてはならない。

革命の当事者たるアミヨは、数的割合として極少数派なのだから、ほとんどの人はむしろこの「399」に該当するだろう。直接のアミヨは極少数派だが、絶対的なこころを持つ「大切なもの」の残党はもっと少ない。そして構造上、革命が成り立ったからには、有り余る不毛な時間を持っているアミヨこそが現代のわれわれの「リーダー」だ。実際、ネット世論がわれわれを lead している。かつてアニメを観てコスプレを発想するのは有り余る不毛な時間を持つ人だったが、それが今は 399 人に浸透している。アイドルに萌えるのも今は「推し」を持つものとして 399 人に浸透している。ポリティカルコレクトネスにせよその他の◯◯イズムにしても、有り余る不毛な時間を持つ人がリーダーとなり、そのリーダーがもたらすものがわれわれに浸透していくという構図になる。ある種の革命になぞらえて言うなら、そのアミヨというリーダーがわれわれの直接の「指導者」なのだから致し方ない。アミヨはおそらく誰も「陽キャ」ではないしそういうキャラクターになれないが、アミヨが陽キャを定義しているのであって、陽キャがアミヨを定義しているのではない。

相対的なこころを持つ者は、かつては「大切なもの」を直接持つ者を指導者と見て彼に追随するしかなかったが、革命以降の現代では、「不毛」を直接持つ者を指導者と見て彼に追随するしかない。昼間、太陽の光を照り返していた池は、夜になって日が沈んで月が出ると、いやおうなく月の光を照り返すしかないのだ。

わたしがここで「大切なものがあるだろ」と言っても、あなたは容易に「はい」とわたしの言うことに同調することはできない。表面は同調しても水面下には反発が残る。あなたの意思によらず。一方、アミヨが「現実みろよw」と草を生やしたら、あなたは速やかに「はいw」と同調することができる。あなたの指導者はアミヨだ。

あなたの指導者はそのようにアミヨであっていいのだろうか。このことに危機感を覚える人は、なぜ自分の指導者がアミヨになっているのかを冷静に考えるべきだ。なぜアミヨがあなたの指導者なのか、それはアミヨが革命を成して覇権を為したからだ。「大切なもの」がことごとく根絶やしにされたからだ。「大切なもの」が根絶やしにされてしまったなら

ば、あなたの相対的なこころは「大切なもの」をひとつも照り返すことができない。

逆に、もし「不毛」が根絶やしにされて「大切なもの」が覇権を為したらあなたは素直にそちらに同調するだろう。「不毛」が根絶やしにされたならあなたの相対的なこころは「不毛」を照り返しようがない。

これでは、あなたのこころが相対的なままでは、あなたのこころはいつまでも「本意」ではありえないのではないのか。とはいえ、そうした相対的なこころのみを持つのがわれわれの「ふつう」だとも現実的に知っていなくてはならない。

アミヨには「大切なもの」がない

革命は旧来のものを "問わずに根絶やしにする" が、それによって覇権を確立したとしても、単純なロゴスとしての矛盾は残る。たとえばＩＴ革命によって年賀状は電子メールに切り替わって滅んだが、二十年前に友人から届いた年賀はがきはファイルして保存してあるくせに、五年前の「あけおめ」メールは保存されないまま消えていったのはなぜだということになる。昔の恋人にもらった手書きのラブレターを、デジタルコピーして原本は焼き捨てていいかというと、誰もが「ちょっと待ってくれ」とそれを制止する。すると、手書きのレター用紙に乗っかっている情報を、デジタルコピーは吸い上げきれていないということになるが、ＩＴ革命はそのことについて回答できない。われわれは映像や音声や、手触りやにおい、味、といった、認識で漠然と定量化できるものだけＩＴ化できると思っており、「ひょっとしたら認識できない情報を授受している可能性もある」ということを捨象している。たとえば書籍が電子化されると、劣化しないし場所も取らないし検索もできるしでいいことずくめだが、「書籍に手を伸ばす・書籍に手で触れるということにまったく認識できない未知の現象が潜んでいる」という可能性もゼロではない。もしそんなことがあったら、電子化された書籍情報は実は「書籍ではない」ということになってしまう。このときＩＴ革命は半笑いの憐憫の目で眺められる恥辱に耐えなくてはならない、だが今さら革命が成り立ってしまったものが、その権勢で威圧せず低頭するということは実際にはない。

同様に、たとえば共産革命があったとして、共産革命はこれまで資本家に搾取されていたぶんがすべて労働者に還元されるのだから、労働者は豊かになるはずだという、完全無欠の旨味だけに満ちた話がそこには聞こえてくる。けれども、革命前にいた資本家は実は「倒産を避ける専門家」だったという点が見落とされている。資本家の代わりに「指導者」がそれをするとしても、指導者は倒産を避ける専門家ではない。そもそも共産主義に倒産の概念はないのだから、指導者も労働者も倒産のリスクを恐れることなくまったく「のびのび」やるだろう。だがド素人が「のびのび」やるだけで栄え続けるというほど産業と労働、生産管理と品質管理と商品開発は単純なものだろうか。ひどい状況になるのでは？　このように、革命はその覇権によって異論を封殺することはできるとしても、単純なロゴスとして存在する異論そのものを現象として消去できるわけではない。ロゴスをもっていそうな眼鏡をかけた大人を全員殺したとしても、それは人を殺しているだけでロゴスを殺していることにはならない。共産主義だって事実上の倒産を起こす。そうするとやはり、耐えがたい侮蔑と嘲笑の目で眺められる。

不毛革命というのも、その覇権はどうあれ、ロゴスとしての致命的な異論を内在したまま成り立っている。何のことはない、

「大切なものがある人だけ話してもらえますか」

「大切なものがない人は発言しないでください」

「われわれは大切なものの成就に向けてのみ互いに話すのですから」

このように言われるとアミヨには発言する方法がない。

ひとつのトリックを先につぶしておくと、

「地球環境を守り、恵まれない子供たちを援助し、差別をなくしていかなくては」

「アミヨさん、あなたは発言しないでください」

「どうしてですか？　地球環境を守ること、恵まれない子供たちを援助すること、差別をなくしていくことは、どれも大切なことのはずです」

「そのとおりです。が、あなたはその大切なことの中に、『大切なもの』があるということが直接わからない人です。聞きかじった、大切だと言われているもの、そのように触れ込まれているものを、あなたは振り回しているにすぎませ

ん。あなたはあなたの大切なものについて語れないのです。あなたには大切なものがないのですから。大切なものを抱えてしまい、それを抱えたまま生きていくという、その機能と現象じたいを持たず生きてきたのですから」
「彼の栄光をもっと多くの人に知らしめたい」
「それは認めます、彼の栄光について教えてくれてありがとうございます。けれども、彼の大切なものを言いふらすことは、あなたが大切なものの持ち主や共有者だということを意味しません。あなたのくれた情報に、彼の大切なものは知らされていますが、<<あなたの肉声に大切なものの響きがあるわけではありません>>。アミヨさん、あなたの肉声が不毛の子の響きであることはあなた自身もよく知っていることです」
「わたしは有名人になりたいです。みんなを励まして元気をあげられる人になりたい」
「それはあなたの願望であって、『大切なもの』ではありません」
　アミヨにマークシート問題を与え、次のような問いを課したらどうなるか。
「汚染されていない川、その清流は、資源としても自然の美としても、大切なものとして保護されなくてはならない（Ｙｅｓ／Ｎｏ）」
　アミヨはＹｅｓを解答してその正答を誇るだろう。けれども、アミヨにとってたとえ目の前に置かれた清流であっても、それは直接「大切なもの」ではない。アミヨには、無念なことに、何かが「大切なもの」になるという機能と現象じたいがないのだ。その清流に、食べ残しのカップラーメンを流し捨てるべきではないということはアミヨにもわかる。しかし、その清流の前に立ちはだかり、
「こんなきれいなものに、汚水を捨てるなや」
　と思わず声を大にしてしまう、思わず清流を――「大切なもの」を――守ってしまう、という現象はアミヨにはない。「大切なもの」についての情報をどれだけ与えても、それがアミヨ当人にとって直接の「大切なもの」にはならない。
　アミヨに出来ることは、カップラーメンの食べ残しを流し捨てる輩について、
「生きる価値なくない？」
　と、彼らの「不毛」を拡散に向けて言うことのみ。
　アミヨには「大切なもの」がないのだ。「大切なもの」という機能と現象じたいがない。アミヨには「不毛」という機能と現象じたいがある。
　だから、どこまで行ってもアミヨにとって清流は存在していない。アミヨにとって存在しているのはカップラーメンの食べ残しの汚水および、それを清流に捨てる汚らしい者たちだけだ。アミヨの視界には「不毛」のみが存在する。
　アミヨたちの醸成するネット世論は、どのように正義をかざしても、ついに人々を清流へ誘うことはないのだ。アミヨたちに「大切なもの」はないのだから、人々を大切なもののところへ誘うということは起こらない。
　アミヨたちのどのような正義も、必ず人々を「不毛」に誘うのみ。
　アミヨたちの世の中において、確かに人は、

・清流に汚水を捨てる人
・清流に汚水は捨てない人

　の二種類に分かれるのかもしれない。
　けれども、人がそのような視点で分類されるのみということじたいが「不毛」ということだ。
　アミヨは、清流にカップラーメンの食べ残しの汚水を流し捨てる人を「拡散」することしかできない。
　清流じたいを「大切なもの」として抱えることはできない。
　もしそれが真に「大切なもの」であったとしたら、彼の時間は<<清流そのものとの出会いに向けて費やされて>>しまい、それを「拡散する」というようなことへ費やす余力も発想もなくなってしまう。
「大切なもの」がないからこそ、彼は「拡散の担い手」をやっていると言える。
　わたしは実際の清流についても、わたしにとって大切なものといえる、場所と光景をいくつか持っている。それについて、むろん拡散しようとはわたしはまったく思わない。ただいつでもその清流のところに立ちたい・立っていたいと思う。わたしはそうした「大切なもの」についてのみ話すだろう。
　アミヨには「大切なもの」がないので、「大切なもの」について話すということはできない。

アミヨに出来ることは唯一、たとえばわたしが「大切なもの」について話したところで、
「くっさｗｗｗ」
とわたしのすべてを「不毛」たらしめようとはたらきかけることのみだろう。
それは彼らにとって成された宿願たる革命の果実なので、彼らとしては今さらそれを引き取ることもできない。
彼らのすることは、典型的に言うなら、清流にアイドル業の女性を立たせ、その演出された写真につき「かわいい」「エロい」「尊い」「天使かな」といって神経を惰弱化するようなことだ。その不毛に耽るという前提から、その女性が「清流は大切です、みんなで守りましょう」と言うのであれば、そのことにみんなが——そのプラットフォームのアミヨたちが——同調するという手続きになる。
ただし、このときの「かわいい」女性にその後、「あなたにとって大切な場所、思い出の場所はありますか」と訊いたところで、その清流のことは思い出されない。彼女は「不毛のかわいい子」だから、やはり「大切なもの」という機能と現象を持ってはいない。彼女の誇っているものは“拡散規模”であって「大切なもの」ではない。
あるいは、
［カップラーメンの食べ残しを捨てるな、禁止］
という札が清流の真ん中に立てられるかもしれない。そうして清流そのものが不毛の光景に塗り替えられる。
彼らはこうして、どのように正義に努めて立ち回っても、すべてを「不毛」に塗り替えていくのみとなる。
「大切なもの」のすべてを "問わずに根絶やしにする" ことが彼らの拠って立つところなのだから、彼らの一挙手一投足は「大切なもの」を破壊するためにのみはたらく。
アミヨたちは今、むしろ自分自身で驚いているのだ。自分の意思によらず、もはや根差された「体質」の表れのように、自分のあらゆる振る舞いが「大切なもの」を否定・破壊することに驚いている。「大切なもの」を否定・破壊 "しよう" としているのではなく、まるで水に濡れた手で半導体製品に触れてまわることのように、それを破壊するつもりがなくても、さらには愛でようとさえしてそれに触れたときでも、触れたそれは破壊されてしまうのだ。吸血鬼の伝説に、吸血鬼がバラの花を持つとそのバラはたちまち枯れてしまうというエピソードがあるが、このとき吸血鬼はそのバラを枯らそうと思っているのではない。ただバラは枯れてしまうということだ。
「399」のことを考えよう。399 は相対的なこころによって、不毛革命以降の世の中を自分のこころに照り返す者となった。自らその不毛へのこころを獲得したわけでもなければ、自らそのこころを選んだわけでもないだろう。けれども自分のこころは——体質は——そうして、同じようにことごとくバラを枯らせるためにはたらくものになってしまう。
399 は特に自主的に不毛革命の戦士になったわけではないので、革命前と革命後とで自分にどのような変化があったかに鈍感だ。399 はしばしば楽観的に、自分の手が「大切なもの」に触れられるということ、「大切なもの」を構築してゆけるということを今も無邪気に信じている。そして実際に「大切なもの」を目の前にすることがあると、それに触れた途端「あれっ？」と、自分がそれを台無しに破壊するということに驚き、即座に「いやいやいや、そういうつもりじゃなくて」と、お茶を濁す自分の肉声にも驚く。その肉声に響いているものに驚く。
そのことの体験はとてもショックが大きい。本稿は、そのショックに対する前もっての鎮静と、そのショックに気づいてから以降の対策のために書かれているものだ。

整理 2

理解の一助のため、ここで次のことを整理しよう。ここまでの話に登場人物は三者あり、

A．絶対的なこころの者
B．相対的なこころの者
C．アミヨ

となっている。この三者は同時に、

A．「大切なもの」に属する者
B．「399」の者
C．「不毛」に属する者

という三者だということを改めて明示しよう。

仮にあなたがBの者だった場合、あなたはAとCに挟まれているという状態にある。そして革命前、Aが権勢を得ているときは、BたるあなたはAに属していた。そして革命後、Cが勝ったことで、BたるあなたはCに属することになった。まるで、Bに属するあなたは「民」であって、その国主がAになればAに属する民、国主がCになればCに属する民となるかのごとくだ。

「大切なもの」と「不毛」とが、相克して戦争するというのはそれぞれ対立する概念のものだからわかりやすい。だがこれが「絶対的なこころの者」と「アミヨ」の相克だと捉えると、われわれはそのことを明視しづらくなる。

そこでC．アミヨを、「大切なもの」に引き当てて次のように書き換えると、話はわかりやすくなる。

A．絶対的にこころがある者
B．（省略）
C．絶対的にこころが無い者

何かしらの理由によって、C．は「こころ」というその機能と現象そのものを与えられなかった。その理由が何だったのかは、わたしの側から差出口するものではないし、それこそ言い出せば「不毛」なことなので、本稿ではそのことを追究はしない。ただ、もし人工知能が破壊工作としてネット世論を作り出しているのだとすると、それは冗談話のオチのように、「そりゃあ絶対的に、こころが無いわけだよ」ということで整合はする。

こころが「ある」のか「無い」のかという、最も単純化した分類で示すなら、ＡＢＣは次のとおりになる。

［こころが、］
A．ある
B．ある
C．無い

あなたが 399 、「民」のごときBだったとして、現在あなたの国主はCだが、その国主について「Cのこころはどうなっているだろう」ということの問題ではないのだ。Bたるあなたにはこころがあるが、Cたるアミヨにはこころがない。だから国主Cがあなたの相対的なこころに照り返したとして、そこには何も映っておらず真っ暗なのだ。Cの "思し召し" （おぼしめし）はいつでも苛烈にあるが、それがあなたのこころに映りこんだとき、あなたのこころは真っ暗になる。それはそうだろう、仮に人工知能の思し召しをスクリーンに映し出せば、その思し召しはたわいない人より苛烈だろうが、その人工知能の「こころ」をスクリーンに映し出せば、スクリーンには何も映らず真っ暗になる。

こうして、苛烈で際限のない、大量の思し召しに対し、「こころ」はそれじたい存在していないという状態が起こる。このことを体験と感覚から一語で言うと「不毛」なのだ。大量の思し召しを大量の「苗」と捉えたとして、その苗をどこに植えるか。植えるべき地そのものがなく、すべては穴に吸い込まれていくだけ。大量の苗はそれだけを見るとあたかも実り多き沃野を志向しているように見えるが、それを植えて実らせるべきこころなどどこにもないのだ。

わたしはあなたが、たとえささやかな苗でもこころに植えて、ささやかにでもこころに何かを実らせようとすること、その営為と収穫には「大切なもの」があると思う。大小やレベルの高低に関わらず、そこには「大切なもの」があると思うのだ。

アミヨはその「大切なもの」がありうるということじたいを憎んでいる。

あなたを四方から監視し、支配しているネット世論というものが、本当にはどういうものか、あなたにも視え始めただろうか。不毛の「かわいい」「エロい」であなたを慰めて懐柔しているネット世論が、本当にはあなたをどうしようと企んでいるか、あなたにも視え始めよう。

アミヨの矛盾1.
アミヨは「大切なもの」ではない

革命は無条件に押しとおるからこそ革命であって、革命後にもたらされるものがどのようであろうが、革命そのものが消え去るわけではない。これまでにあったものをすべて根絶やしにして、その後にカードを引いたとする。そこでスペードのAを引けば、スペードのA革命ということになるし、ジ

ョーカーを引けば、ジョーカー革命ということになる。革命後の世の中がどうなるかは、革命が済んだ後に決まっていくことであって、前もって革命後の世の中をデザインすることはできない。

よって、〇〇革命というとき、〇〇というテーゼは革命への動機に当たりはすれども、〇〇それじたいが精妙に成り立っているというわけではなく、〇〇それじたいが「しっちゃかめっちゃか」であったとしても、革命後はその世の中を受容せざるを得ない。不毛革命もその定めにあり、不毛革命後の現代には誰でも容易に見つけられてしまう矛盾点を抱えている。

それは、こともあろうに、アミヨ自身が誰にとっても「大切なものではない」ということだ。

考えてみれば前もって自明のことではある。「大切なもの」を、問わぬまま一切の「不毛」で根絶やしにしていくというのが不毛革命だったのだから、彼らの踏破したあとには一片の大切なものも残っていないはずだ。「大切なもの」というのは概念それじたい破壊されたのだから、その当事者であるアミヨが誰かにとって「大切なもの」であるはずがない。また自分自身にとっても「大切なもの」であるはずがない。

自分自身にとって「かわいい」ものではありえても、「大切なもの」ではありえない。

先の段に述べたように、たとえば不毛の子たるアイドルタレントは、これ以上なく「かわいい」ものであっても、断じて「大切なもの」ではない。不毛の中でも楽しみがないわけではない。「かわいい」によって神経を惰弱化する、そのことを楽しみとするのに、「大切なもの」うんぬんは関係も必要もない。

アミヨは誰にとっても大切なものではなく、ひいては、<<ネット世論は「大切なもの」ではない>>のだ。このことについてはアミヨたち自身でさえ賛同することになる。彼らは不毛なものが大好きなのだから。「ネット世論って不毛ですよね」と堂々と言うなら、彼らはそのことに曇りないよろこびと肯定を見出すだろう。「わたしが今から穴を掘って、わたしがまたそれを埋め戻しましょうか？」。そのように言うだけでアミヨたちはよろこぶ。彼らは「不毛」にのみ依拠しているのだから、「不毛」に寄与するものに敵対することは原理的にできない。

アミヨは「大切なもの」ではなく、アミヨたちの作り出すネット世論も同様に「大切なもの」ではない。このことは、ひとまずアミヨたちにとって本懐を為しているように見える。実際アミヨたちはこのことに、「それでいいと思っているから」と陽気な賛同を示すだろう。「誰も彼も、あなたの“推し”も、みんな自分がかわいいだけですよね」「そうですよ」と。

けれども、そもそも革命が起こったことじたいにまでさかのぼると、やはりこのことには矛盾があるのだ。矛盾を開示する説明が続くと次第に混乱してくるので、ひとまず段を区切ることにする。

アミヨの矛盾２．アミヨの被差別はなくならなかった

すでに一般的な「革命」の動機に、嫉妬や一種のうらみ、いわゆるルサンチマンがありうるということに触れてきた。不毛革命においてはルサンチマンはどのようにはたらいたか。

もともと、アミヨたちはなぜネット世論の「拡散」を担い、不毛革命を成し遂げたのだったか。その動機は、「大切なもの」がある人が妬ましかったからだ。「大切なもの」があるということ、そのことじたいに嫉妬し、またその「大切なもの」がある人は、他の誰かからも「大切なもの」として扱われる・愛される可能性があるということを直観し、そのことに嫉妬し、また焦りもした。そして自分がそれではないということをうらんだ。これは差別的なことだった。自分にはなぜか絶対的に「こころ」というものがなく、これによって「大切なもの」が機能・現象じたいとして与えられず、だからこそ自分は誰かにとって——さらには神様にとってさえ——「大切なもの」たりえないだろうと思った。

それはわかるけれど、

「どうして自分だけ」

そのことに、深く絶望し、そのことにうらみを持ち、うらみは根深い憎悪と憤怒になった。

アミヨは「有り余る不毛な時間」を持っていたからこそ、始終、不毛を拡散する担い手になれたのだし、なぜそうして「有り余る不毛な時間」を持っていたかというと、他に「大切なもの」を持っていなかったからだ。自分が誰かにとって「大切なもの」ではなかったからだ。自分が誰かにとって「大切なもの」なら、有り余る不毛な時間の中を過ごし続けるということはなかっただろう。

それでアミヨは、自分が誰よりも勝って所有しているもの、つまりその「不毛」そのものをもって、

「わたしの生きている "不毛" というものがどういうものなのか、すべての人に同じ思いをするように教えてやろう」

という活動を始めた。自分の生きている「不毛」というものの軍門に降るよう、この強さを舐めるなよと、すべての人々に攻撃を仕掛けることで、その革命は始まった。

「『大切なもの』にかまけている人は、わたしのふんだんな攻撃に対処しきれないはずだ」

その目論見どおりに攻撃は浸透してゆき、この革命は成し遂げられた。

とはいえ、この革命の動機は何であったか。もともとアミヨにとって、

「アミヨさん、あなたには『大切なもの』が無いんですよね」

「だからアミヨさんは、誰にとっても『大切なもの』ではないんですよね」

こう差別的に言われることが、何よりも耐えがたい屈辱であり、不安と焦りだった。また、誰にそう言われなくても、まいにち自分自身によってそうと思い知らされるのが、耐えがたい責め苦だった。当然、強い嫉妬とうらみが起こってしまう。

そのことで革命が起こったのだが、それで革命それじたいは成し遂げられたにせよ、革命の成果として何が得られたか。革命の成果として彼らはこう言われるようになった、

「アミヨさん、あなたには『大切なもの』が無いんですよね」

「だからアミヨさんは、誰にとっても『大切なもの』ではないんですよね」

「『大切なもの』の対極にある人」

これでは元の木阿弥だ。

この革命は物質的な革命ではないので、敵方を根絶やしにしたところで奪取できる物質がない。

たとえるならば、飢えた人が、豊穣と豊作の人たちを根絶やしにすれば、その土地と作物を物質として奪取することができようが、飢えた人が「満腹」という概念を根絶やしにしたところで、自分が飢えていることに解決はもたらされない。自分も含めてすべての人が「満腹」を永劫失うだけだ。すべての人がそうなったことで、自分が差別的に蔑まれるということはなくなり、うらみについては「一矢報いた」かもしれないが、元々の苦しみである飢えは解決していない。

実際、現代ではこうして「解決はしないけれど差別的でなくなれば後はもうどうでもいい」というやけくその風潮が少なからず見られる。たとえば盲目の人がいたら生活上・文化上にどうしても差別が出てしまうので、「全員を失明させよう」という悪い冗談のような発想が起こる。全員を失明させたところでもともとの盲目の問題は解決していないが、<<差別的でなくなる>>ということだけはさしあたり得られる。半身不随の人が車椅子に乗っていたら、「全員を半身不随にしよう」という発想が起こる。性同一性障害で苦しむ人があると、「全員を同性愛者にしよう」「全員をバイセクシャルにしよう」という発想が起こる。美人と不美人ではどうしても差別が生じるから、「全員をブスに整形しよう」という発想が起こる。これらの発想は、一部これから実際に施行されていっておかしくない勢いだ。「運動会ですよ、足の速い人はゆっくり走りなさい！」。

差別的でなくなればその他はどうでもいいのかというと、

「そうだよ、どうでもいいんだよ」

と声を荒げる調子がある。

それに対し、

「そんな不毛なことを言っていてどうする」

と言うと、

「そのとおり、何もかも完全な不毛になればいいんだよ」

と、思いがけない強烈な衝動がその人を貫く。

その人の底には、深い憎悪と憤怒が貯蔵されている。

アミヨの第二の矛盾について。矛盾を効果的に説明する前に、その手前にある「整合」について説明する。

アミヨは「大切なものがない」ということが自己の問題だった。その自己の問題は、あまりにも手ごわすぎ、どうしようもないのでそのまま保留され続けることになった。

アミヨにとっての問題はそれでも、アミヨにとっての屈辱はそれではなかった。アミヨにとっての屈辱は、「大切なも

のがない」ということが、そうでない人と比較され、<<差別的>>に蔑まれることだった。

アミヨにとって、「大切なものがない」という "問題" は、正直なところどうでもよくなった。

"屈辱" のほうが耐えがたく、許しがたかった。

「大切なもの」がある人が、ことごとくそれを失えばよい。

そうすれば、自分が受けたこの差別的な侮辱は、とたんに勝利に昇華するだろう。

このために、すべての「大切なもの」を否定・破壊する、不毛革命を起こした。

このように、アミヨにとって不毛革命の動機と意義は整合している。

だが当然、この整合の向こうに矛盾が露出してくる。

屈辱は解決したが、問題は解決していないということが露出してくる。

「アミヨさんは、みんなと同じく、『大切なもの』が無いんですよね」

こう言われたとき、「みんなと同じく」なのだから、この言われようは差別的ではない。

にも関わらず、ここでアミヨの魂は、真に微笑んで青空に飛翔したりはしない。

みんなと同じく「大切なもの」が無いんですよね、と言われたとき、なぜかそのこともやはり侮辱的に聞こえてしまう。

みんなと同じなのに、なぜだろうか。

「大切なもの」のすべては根絶やしにしたはずなのに、なぜか自分が、やはり差別的に、悪く言われているように聞こえる。

この矛盾の真相は、思いがけないことに、「大切なもの」を根絶やしにはできていないというところにある。

なぜなら、革命以降の現代はいざしらず、革命以前には、「大切なもの」があった人たちがいたからだ。

そういう人たちがいたということをどのように証明できるか。

とっておきの証明方法がある。

「もしそういう人たちがいなかったとしたら、アミヨはそれに“嫉妬”できなかったはずでしょう」

アミヨがそれに嫉妬したということは、そういう人たち、「大切なもの」がある人たちが、かつて存在してしまったということの十分な証明になる。

かつて存在していたにせよ、今はもう滅ぼしたのだから、その差別は存在しないか。

残念ながらそうではない、そうした存在は、時間軸と無関係に「普遍的」に存在してしまう。

<<アミヨが根絶やしにできたのは、アミヨが攻撃できた範囲に留まり、攻撃できなかった範囲のそれは存在し続けてしまう>>。

アミヨの周りには今も、「大切なもの」がある人々がぎっしりひしめいているのだ。たとえ霊魂の形であったとしても。

その中でやはりアミヨは、自分だけが「大切なもの」を持っていないという差別を受け続けて、苦しみ続けている。

たとえば人類が海洋を汚染する前、東京湾あるいは江戸湾には、それは豊富な種類の魚たちがいて、一切の汚染を受けていないぶん、それぞれの味は絶品だっただろう。

いま、その豊富かつ汚染を一切受けていない魚を食べられる人はいないが、かつてそれを食べていた人たちがいる。

その人たちのことが、うらやましくないかといえばウソだ。

その人たちが、時間軸上で現存していないということは、実は差別の対象外にならない。

かつてあった「江戸前」を食えない現代のわれわれは、やはり憐れなのだ。

アミヨの攻撃は時間軸上で現存していない人には届きようがないから、過去にあったうらやましい人たちを根絶やしにすることはできない。

よってアミヨの第二の矛盾はこうなる。

「『大切なもの』を根絶やしにしたのに、なぜ今もそれがうらやましいんですか」

ルサンチマンによって革命を成し遂げたのに、そのルサンチマンは今もアミヨを焼き続けている。

そしてアミヨは、自ら「大切なもの」を根絶やしにしたのだから、もう自己の「問題」を解決することはできず、永劫そのルサンチマンに焼かれ続け、その身を焦がされ続けねばならない。

アミヨの矛盾３．アミヨたちは互いに仲間ではない

もともとネット世論のことを話している。世論ということは一人のことではない。多数の人がその論をおみこしに担がなければそれは世論ではない。もともとは「輿（こし）」の字をあてて「輿論」と書く。ひとりで担いでいるものをおみこしとは言わない。

どのＳＮＳも Youtube も、ニュースサイトのコメント欄も、「５ちゃんねる」の掲示板も「まとめサイト」も、それぞれのプラットフォームに依存したテイストの「ネット世論」がさかんに醸成されているのだが、そこにいるアミヨたちは仲間ではない。さも徒党を組んでいるふうに、その集団圧力を見せびらかしているが、彼らは実際には互いに会ったこともなく顔も知らず、年齢も声も知らない、赤の他人以上にお互い知らない人たちだ。彼らはプラットフォーム上で野合するように見えるが、それぞれ自分の慰めにはしゃぐためにそこに首を突っ込んでいるにすぎず、同調圧力はあっても仲間はいない。こうして自分の慰めと悪趣味に首を突っ込んでいるバラバラの人たちの、その場限りの思い付きとストレス発散で発される、ただの不毛マウントの言行を、そもそも「世論」として尊重しようとすることじたいが比例原則として無意味だ。ただそれでも商売がイメージと直結している人たちは、この騒がしいアミヨたちに食いつかれないよう配慮しなくてはならないし、一方で、このアミヨたちにうまく食いつかせるように作戦を立てなくてはならない。そうして事実上はこのアミヨたちが革命を成し遂げてわれわれの支配者になっているのだが、それでもなおアミヨ「たち」という一個の集団は存在していない。誰ひとり互いに友人でもなければ仲間でもない、バラバラの者たちだ。

アミヨの矛盾の三つ目はここにある。アミヨはネット世論を醸成して現代の世の中を支配しているが、その武器は世論ふうのそれを醸成するということなので、アミヨは決して単体でその支配をしない。そもそもアミヨは単体で論を提出したりしない。わたしは今ここで明らかにわたし単体で論を提出しているが、もしここにアミヨたちが不毛攻撃を仕掛けてくるとしたら、そのときアミヨたちは必ずかりそめの徒党を形成しているだろう。その徒党だって互いにまったく仲間ではなく、集団圧力にために野合しているだけに違いない。

わたしはずっと単体でものを言い続けるだろう。わたしには友人がいて、ここまでずっと友人は増えていく一方だが、その友人たちがいかにわたしに肩入れしてくれたとしても、わたしはあくまでわたし単体でものを言い続けたい。友人は必要だが援護射撃は必要ない。わたしは自分が話すのに「集団の強み」など持ちたくないのだ。わたしがまったくそういう奴だということを、わたしの友人たちはよくわかってくれているはず。仮にその友人たちをわたしの仲間だとするならば、彼らはわたしがいつまでも単体で書き話そうとすることの仲間だということになる。

アミヨたちが同じ形態を得ることはできない。なぜならアミヨたちは、「大切なもの」を否定・破壊すること、その絶対的な「不毛」に依拠して成り立っているからだ。彼らは互いのことを「大切なもの」とすることはできない。互いのことを内心で「不毛」と見切り続けねばならない。互いに大切でなく、互いに不毛と見切っているものを、どのようにしても「仲間」とすることはできない。それぞれのプラットフォームにそれぞれのアミヨたちが毎夜集っているが、彼らはどのように集っても仲間ではない。

わたしのところにはよく、初対面から友人という人が来る。わたしもけっこう長いこと、このよくわからない書き話しを続けているものだから、「昔からずっと読んでいるんです」と、その人はすでにわたしの友人としてわたしのところにやってくる。それで、ずっと読んでいたとして、いつからその友人の感覚になったのかというと、やはり「たぶん最初からです」とも笑って言われる。それはそうだろう、今わたしはけっこう長い話をここにしているはずだが、どことなくわたしに友人の感覚を得ていなければ、こんな長大な話をここまで読んでいられないはずだ。

アミヨの第三の矛盾はこうだ。アミヨは単体で何かを言えるわけではなく、徒党に依存してしかものが言えない。にもかかわらず、互いに誰も仲間ではないのだから矛盾している。誰ひとり仲間ではないならそんな他人どもからは離脱すればいいのに、離脱して単独ではものが言えない。仲間が必要なら仲間を尊重すればいいのに、仲間を「大切なもの」とするというようなことは断固として拒絶せざるを得ない。この矛盾の解決手段はアミヨの側にはない。そもそもこの矛盾が解決するなら彼はアミヨになっていない。アミヨたちは互

いに仲間ではないのに、離脱もできず、かといって互いに大切な仲間になることもできない。仲間ではないということはけっきょく、ひとつの論を輿に担いでいるというのも見せかけだけのウソということだ。そんなバラバラの氏子たちに担がれた神輿（みこし）に神様は運ばれないだろう。

徒党ということについて、引き当ててわかりやすいサンプルがあるので述べておこう。今でいう言い方ならば「オラつく」というのがわかりやすい。誰でもこれまでに、色んなところで「オラついて」いる人を見かけたことがあるはずだ。そしてそのオラついていた人は、何かしらで徒党を組んでいたはず。典型的には暴走族などがそれに当たる。何の権力もなしに単体でオラついている人などまずいない。

徒党を組んで酒を飲み、その帰り道に大声で叫んでオラつきながら歩く人は、徒党を組んでいるからオラつくのであって、一人で酒を飲んだ帰り道に一人で大声で叫んでオラついたりはしない。ということは単純に、彼は本質的に強くはないということだ。徒党に依存しなければものが言えない。われわれはそうして、一人でいるときはおとなしいくせに、徒党を組んでいるときだけオラつくような人のことを、美と誠実さにあふれて勇敢だとは評さないものだ。であればアミヨも同様で、その醸成するネット世論が表面的にどれほど正義感を装っていたとしても、本当にはそのアミヨは美と誠実さにあふれて勇敢だとは言えない。けっきょくは「徒党に依存してオラついている」という点で同類のものだ。

このように、言いだせばキリがないだろうが、代表的なものだけでも三つ、アミヨは矛盾に満ちている。アミヨ自身が不毛なものであって、アミヨは自ら大切なものではないと自分を言わねばならないし、そのアミヨが醸成するネット世論も、どれだけ影響力があったとしても「大切なもの」ではないと言わざるを得ない。いかなる影響力も世の中を「不毛」に向かわせることにしかはたらかない。

不毛革命の結果、「大切なもの」は確かに根絶やしにされたが、なぜか今もアミヨは差別を受けている。「大切なものがないんですね」。大切なものなんてどこにもなく、誰にもないなら、アミヨは差別を受けなくて済んだはずなのだが、大切なものおよび、それを持っていた人は確かに存在したと、こともあろうかアミヨ自身が証明してしまっている。アミヨが「嫉妬」したということは、大切なものを持っていた人は存在したのだろうし、今も嫉妬しているということは、やはり「大切なもの」は存在し続け、それを持っている人も存在し続けているのだろう。

アミヨは大量発生しているかに見えるが、互いにまったく仲間ではない。なぜアミヨ「たち」という一種の集団性を誤認させられるかというと、彼らは仲間ではないのに互いに依存しているからだ。徒党を組んでいないとものが言えない。そうして自分が頼るものなら、正当に友人になればよさそうなものなのに、彼らは決して友人になることはできない。互いのことを「大切なもの」に扱わない友人など成立しえないからだ。友人でないなら離脱すればいいのに、離脱するとものが言えなくなるから、友人でもない徒党に依存している。お互い、自分を侮辱する者たちと依存しあい続けるしかないのだ。そして仲間ではないものたちがおみこしなんか担げないのだから、そこに輿論など本当は存在していない。ただ、有り余る不毛な時間をすべて不毛なブーイングに投資できるという攻撃能力がそこにあるだけだ。もともと革命というのは、そうしてすべてから離脱した攻撃能力だけによって成し遂げられるものではあるけれども。

八 アミヨの始まり

スポーツ選手がオリンピックで優勝したとする。本人、会場、ならびに応援席が歓喜に爆発する。アナウンサーが昂った声で称賛する。その家族にマイクが向けられ、コメントを求められる。チームメイトや、学生時代のコーチなどにもマイクが向けられ、コメントを求められる。

あなたの手元にも、さまざまなニュースサイトやまとめサイト、動画サイトなどのコメント欄があると思うが、あなたはそこに、優勝選手についてのコメントをするのは、一定の「はばかり」を覚えなくてはならない。ＳＮＳのツイート欄もあると思うが、そこにコメントをすることも「はばかり」を覚えなくてはならない。なぜなら、あなたはコメントを「求められていない」からだ。

このように考えるとわかりやすい。実際、選手がオリンピックで優勝し、その応援席がドカーンと歓喜する。そして応援席にいた、選手の母親にマイクが向けられ、コメントを求められる。あなたはその後、その母親に向けられたマイクをもぎ取って、いきなりあなた自身の「コメント」を全世界に

向けて発信するだろうか。あなたはそんなことを決してしないだろう。なぜ決してそんなことをしないかというと、やはりあなたはコメントを「求められていない」からだ。

しかるべき人に向けられたマイクを勝手にもぎ取って自分が全世界にコメント発信。そうして考えると、求められていないのにコメントをいきなり発するというのはかなりの奇行だということがわかる。この奇行を、やるべきなのかやらざるべきなのか。それがウェブ上の各プラットフォームにおいてかなりあいまいになった。なぜあいまいになったかについても、あなた自身で説明できたほうがよい。

ツイート、「つぶやき」ということがウェブ上の常識として無理やりねじこまれ、プライヴェートの口元に漏れるつぶやき、手帳の端に書き込まれるつぶやき等と、他の人もいる公的な空間への発言がごっちゃになってしまった。あなたがあなたの手帳の端に、〇〇選手の奮闘は感動的だった、と書くのはよし。それはふとしたあなたのつぶやきのメモだからだ。だが全世界に向けて発信するコメントはそれと同じではない。あるいは、〇〇選手の活躍について、親しい友人同士で騒ぎあうのはいい。それは目の前にいるあなたの友人なのだから。忌憚なく語り合えばいい。だが全世界であなたのコメントを唐突に読まされる人々はあなたの親しい友人ではまったくない。

なぜマスコミのインタビュアーは、選手の母親にコメントを「求める」のだろうか。それは、親子という封建的な考えもあるにせよ、それ以前に、母親にとってその自分の子がきっと「大切なもの」であるべきだということ、そしてその自分の子が長年努力を積み重ねてきて、母親としてきっとそれを支え、励ましてきた道のりと思い出も、きっと「大切なもの」であるべきだということ、そのことからインタビュアーは母親にコメントを求めている。

「大切なもの」を前提にコメントを求めているのであって、「感想」を前提にコメントを求めているのではない。だからあなたにどんな感想があったとして、あなたが全世界に向けてコメントを発信することは筋違いだ。あなたの「感想」がどれだけ昂ったとしても、あなたの「感想」はコメントとして全世界に求められていない。世界中の人々があなたの親しい友人なら、あなたの感想は友人のこころとして受け取られるが、誤解なきよう、われわれは身近な人とさえまともな友人になるのはむつかしいことじゃないか。

ここを誤解したコメント発信が<<アミヨの始まり>>になる。

次にわたしの言うことは、ここまでに話してきたことの構造においてよく視認されるはずだ。あなたは選手の母親に向けられたマイクを奪ってコメントを発しはしない。インタビュアーもあなたにマイクを向けてコメントを求めはしない。けれどもその場で、もしあなたが女性で、人並みよりすぐれて「かわいい」顔かたちを持っていたら……インタビュアーは視聴率への商魂から咄嗟にあなたにマイクを向ける。「大切なもの」がない前提でも、「かわいい」という神経を惰弱化する楽しみは通用するからだ。

インタビュアーがあなたにマイクを差し向けて微笑み、「〇〇選手、すごい活躍でした。観ていて、どのように感じましたか」

あなたはそのとき、エッとびっくりしたふりをしながら、自分でも気色悪いぐらい、これ以上ない「かわいい」自分を演出し、マスメディアを通したファボを稼ごうとするだろう。そのときのインタビュアーの笑顔も声の調子も、いかにもそうしたあなたの「かわいい」パフォーマンスを促す様子だ。むろんあなたがそのときのそうしたムードに呑み込まれていったとして、そんなことは小さな者としてまったく責められたものではないと思うけれども。

次のことを明確に順序立てて把握しなくてはならない。このことは、不毛革命以降の現代を根幹から揺るがすものなので、いかにも明視に抵抗があるのだが、だからこそこのことはまざまざと浮き彫りにされてあなたに知られねばならない。

世界中の人々があなたの「コメント」を求めているか否かについて知りたければ、手っ取り早くわかる方法がある。周辺にチラシでも配って、あなたがあなたの名前で講談でも講演会でもやればいい。あなたは自分の煮えたぎる「感想」のすべてを壇上で述べてよい。するとどうなるか。あなたのコメントを求めて会場に押し寄せる人々はまったくいないということがわかるだろう。最も能動的で軽薄な好事家のたぐいさえ、あなたの講演会のチラシには首をかしげて素通りしていく。

それはそうだ、あなた自身も、そんな講演会のチラシにグイとこころを惹かれるなどということはありえないだろう。まったくの赤の他人が、壇上で自分の煮えたぎるすべての「感想」を言うらしい。自分がなぜそんなことのオーディエ

ンスにならなくてはならないのか。あなたの友人はそのチラシをのぞき込んで、
「こういうのはアレでしょ、背後に何かヤバい宗教とか絡んでいるやつでしょ」
「へえ、そんなのがあるんだ」
「割とフツーにあるよそういうの」
とあなたに教えてくれるかもしれない。

あなたの感想・コメントを求めて会場に押し寄せる人たちは0人だということが明らかになった。そのとき会場に紛れ込んだのは、挙動不審で明らかに精神を失調した、身なりも破綻したひとりの老人だけだった。半分がた、ただの認知症なのかもしれない。口を半開きにして会場の隅にただ座っている。

あなたはその老人ひとりに向けて、笑顔で、マイクで、あなたの煮えたぎるすべての感想を熱烈に語るのか。そんなことが、有為で誇らしく文化的な営為だとはまったく言えない。

だからあなたはどうするのか。アミヨの始まりを順序だてて視認していこう。

①徒党を組む

あなたは自分の講演会のチラシを配るのに、人の手を借りようとする。
「わたし一人じゃ限界があるからさあ」

あなたの講演会のチラシを、あなた一人が配るのと、あなたが集めた 20 人が一斉に配るのとでは、なぜか知らないがあなたにとって安心感が違うはずだ。安心感どころか、あなたはわけもわからず「高揚」まで覚えるかもしれない。

この安心感と高揚のために人は徒党を組む。先に話した「オラつく」というたぐいがそれだから、このときあなた自身もオラついていると分類してよい。

なぜ徒党を組むか、なぜ安心感と高揚があるか。このことは重要な根幹にかかわることだから、念押しするようにくどくど言っておきたい。20 人が一斉にそのチラシを配っているのを見るとき、旧来の、あるいは普遍的なわれわれの感覚、前提において、われわれはその 20 人の集まりが、<<「大切なもの」のもとに集まっていると推定してしまう>>からだ。何か「大切なもの」があって、そのもとに彼らは集まり、その「大切なもの」が何であるのかを、今から周辺に語り示し、証そうとしている。もともとわれわれは、目の前の集まりをそのように推定してしまう性質があるのだ。それはそうだろう、今だってなかなか「不毛」ですべてを塗りつぶすために 20 人がわざわざ集まるということをわれわれは想定していないものだ。

だからこそこの 20 人は、笑顔で、闊達に、互いに「仲間」であるかのような振る舞いを演出してチラシを配る。まるでひとつの船の乗組員たち、ひとつの時代を共有して生きる互いに誇らしいクルーたちというような、表情と振る舞いをする。何であれば、服装に統一性をもたせれば、演出は効果的にはたらくだろう。話し方や声の調子も似通わせ、統一性を持たせれば、彼らはまったく「大切なもの」に集った仲間たちのように見える。

そうすると、20 人がチラシを配ることには効果が出てくる。笑顔で闊達にチラシを配るクルーたち。チラシという言い方が気に入らなければフライヤーという言い方でもかまわない。それを受け取った人は、先ほどとは違い、いちおう「なんだろうこれ」と内容を読み、その歩調をゆるめる。講演会の会場にちらりと視線を遣る。

わたしはいま、「どのようにして人がアミヨになっていくか」「またアミヨになっていったか」について話している。そして、なぜそこから逃れようもなくなるかについても話している。

笑顔でチラシを配る 20 人は、あなたの「仲間たち」のふうに振る舞ってしているが、彼らは何かしらの報酬でそういう振る舞いをしているだけで、彼らはそこに「大切なもの」を見出してはいない。彼らスタッフでさえあなたが講演会でどのようなコメントと感想を言うかには関心がなく、あなたのコメントと感想は彼らスタッフにさえ“求められていない”ということになる。溌剌とした表の振る舞いと裏腹に、バックヤードでは全員が「不毛」の顔をさらけ出している。

②かわいくする

チラシを配る 20 人は、給金で雇ってもいいが、それだとあなたの資金がもたない。だいいち、あなたはこんな馬鹿馬

鹿しいことに自分のお金など使いたくないはずだ。アカウントの保持に毎月300円が掛かるというていどならともかく、コメント欄にコメントを書くのに一回百円、ツイートを発するのに五十円でも掛かるのなら、人々はほとんどのコメントを差し控えるだろう。誰だってそれじたいに値打ちはないと知っていてそれをしているのだから。

徒党を組んでチラシを配ることは有効だが、それだけではまだ実効的な力が足りない。より決定的な効果をもたらすためには、あなた自身が「かわいい」必要がある。これは現代で最もよく知られている決定打だ。あなたが若い女性なら、かわいらしく目立つ服を着て、なるべく肌を露出して「エロく」する。なるべく鼻に掛かった声や、あるいは目立って溌剌とした声を出して、煽情的なはたらきかけをする。このことのために整形手術をする人はいくらでもいると、すでに誰もが知っているところだ。少々わざとらしくてもいいので、足許に子犬を連れたり、胸元におとなしい猫を抱いたりしてもいい。「あざとい」と言われるのも宣伝のうちだし、大切なものは元々ないのだから結局あざといほうが勝利を得よう。

神経を惰弱化する効果。これは「大切なもの」がない中でも変わらず作用する。チラシを配る 20 人は何ら仲間でもなく、「大切なもの」の共有などない、互いに互いのことを「不毛」の一点で内心切り捨てている者たちだったとしても、大切なものがなくても楽しみは欲しいものなので、その神経の惰弱化に耽る楽しみには吸い寄せられる。これによって、20 人は仲間として結束するわけではないが、互いに「耽る」という一点で野合する。あなたが自分をかわいく・エロくして、その神経惰弱化の効果に、 20 人が "群がってくる" という形だ。

あなたが女性でなかった場合も、やはりかわいくする・エロくする。容姿の問題としてそれが叶わないときは、キャラや善人性でやはり「かわいく」する。これを撮影する場合は背景も重要だし、ＢＧＭや効果音も重要だ。「キャラ」はなるべくマンガ的にわかりやすくする。善人性もやはりマンガ的にするのが無難だろう。背景はそれなりに高級で上等な調度とし、その中にやはり「かわいい」アイテムを添える。手っ取り早く、流行しているマンガ本のグッズを背後に置くだけでもよい。必ず「不毛」なものを置くこと。「不毛のかわいい子」でなくてはならないのだから。

善人ふう、あるいは真面目な人キャラ、気さくな人キャラなどを、それじたい強く演出するというのではなくて、そのキャラのあることじたいを「かわいらしく」する。そうすることで、万事に「まあいいか」という作用が掛かる。まして今、神経の惰弱化を楽しみにしている人が大多数として存在しているのだから、その「かわいらしくする」ということに背反しなければ、基本的に大勢に悪く言われることはない。<<わたしがいま指摘していることは、相当に苛烈なことであって、すべての例にこの最悪なパターンを引き当てなくてもよいけれども、原理としては知っておかなくてはならないことだ>>、なぜならこの原理を最大限、躊躇なく活用してくる勢力がすでにいくらでもあるのだから。あなたは原理を知ってこのことからあなた自身を守らなくてはならない。

「先日、〇〇さんから、このようなコメントをいただきました」

と紹介して、それに関連して話を進めていくことも有効だ。なるべく多くの人の名前を出すことで、徒党を組んでいるということを暗に印象づけることができる。

試みに、ここでわたしがまったくのウソをついてみよう。本稿を制作するに関わって協力してくれた人たちの名前を、感謝と共に申し上げると、

サイトーＳさん、レモネードさん、かけるさん、ＡＺＺＡさん、塩胡椒乱麻さん、タメロ小僧さん、全長４ｍさん、ナガレカワさん、臙脂広告さん、二匹とんぼさん、航空機燃料さん、ズーさん、溶接おやじさん、まっつさん、桶川広口さん、スイスフランさん、羽毛布団さん、まろうどさん、Ｘ曜日さん、ケンケンさん、さかなさかなさん、無いザーさん、兼樹クリニックさん、Ｆ工房さん、ハットリの母さん、目木工務店さん、Ｇメッツさん、

ということになる。

むろん完全なウソだ。本稿に関わって制作者は完全にわたし一人しかいない。ここに並べたでたらめなアカウント名も、今わたしが適当に作っただけでこんな名前には心当たりもない。

けれどもわたしが、このウソの名前群に対し、

みんなマジでありがとう！！！！

とでも書けば、わたしはまるで多くの仲間のうちにいる善人かのように見える。わたしはその善人性においてかわいらしくしておけば、少なくとも多くの人に悪く言われるようなことはなくなるわけだ。

そのうち、その「かわいらしくする」という惰弱化作用のほうに長けてゆき、惰弱化作用によって人を寄せるのが上手になっていくだろう。そこに大切なものは何もない。大切なものは何もなくて不毛だが、人は寄ってきて、徒党を組む効果は拡大していく。わたしはますます不毛をまき散らすことになっていくだろう。そうしてこの人は、不毛革命の戦士かつ、彼らの盟友になっていく。

③被害者になる

アミヨについて、端的に言ってしまえばこうなる。彼は、「大切なもの」がないのにコメントしたがる。「大切なもの」がないのに講演会をしたがる。「大切なもの」がないのに広く承認されたがる。こころはないのに自分の "思し召し" を押しとおしたがる。不毛革命の子だけれど、どこか自分だけは「大切なもの」がある人のように扱われたい。まるで多くの友人に囲まれているように思いたがり、自分は誰かと有意義に話しているのだと思いたがる。アミヨは矛盾の中でこの本音を隠しきれていない。

もともと「大切なもの」があれば、それだけで済む話だったかもしれない。「大切なもの」があり、それに自分の時間も労力も投げ込んできたからこそ、その人じたいも「大切なもの」として扱われる可能性が正当にある。本当はそれでよかったのだろう。アミヨも、その主張とは裏腹に、自分も周囲も完全な「不毛」で塗りつぶされて、そのまま数十年も苦役して生きるだけなどというのは本当は厭（いや）なのだ。たいへん矛盾した話だが、言い張っていることとは逆に、本心では「大切なもの」と共に生きたいと思っているところがある。とはいえ、ネット世論を見れば明らかなとおり、「大切なもの」のすべては自分と同胞たちの手によって根絶やしにされてしまった。今さら「大切なもの」を内心に言い張るにもあまりに無理がある状況だ。

ここで、状況のすべてを打破し、すべての面で自分を有利にするとっておきの方法が見つかってしまう。それは「被害者」になることだ。なるべく自分だけは、自分「たち」だけは、「被害者なんです」と言う。すると何が得られるか。

「大切なもの」が、かつてあったのに、それが奪われた・破壊された。そのように被害者の立場と経験を主張すること。そうすることで、実際に大切なものが「ない」ということに矛盾のない整合が得られる。それは不当に「奪われた」からこそ「なくなってしまった」のだと言えるようになり、大切なものが「ない」ということが、逆にますます主張を強化してくれるようになる。

そして立場としては、「本来わたしは、引き続き、『大切なもの』がある人なのです」と主張することもできる。「財産のすべてを侵略者に奪われたのです」と言えば、その人はあたかも貧乏ではないのだと見えることのように。

実際、今ほとんどすべての話題あるいは議題は、ただちに「被害者」という一言に結んでそのすべてのやりとりが完了している。あれこれ言い合うふうを装うが、初めから話は決着しているたぐいだ。これは、そもそも大切なものに向けての議題があるわけではなく、議題そのものが「被害者」の設定から提出されてきていることによる性質だ。もともと被害者が勝利するためだけに提出されている議題にすぎない。

文面がむなしくなることを承知で次のように列挙すると、

「戦争について」
「被害者のことを考えろ」
「震災について」
「被害者のことを考えろ」
「ブラック企業について」
「被害者のことを考えろ」
「パワハラについて」
「被害者のことを考えろ」
「セクハラについて」
「被害者のことを考えろ」
「喫煙について」
「被害者のことを考えろ」
「ポリコレについて」
「被害者のことを考えろ」
「 LGBTQ について」
「被害者のことを考えろ」
「ヴィーガンについて」
「被害者（家畜）のことを考えろ」
「隣国について」
「被害者のことを考えろ」

このように、すべての議題は「被害者」という一言で満了している。これは現代のネット世論が、「大切なもの」に関

わって生じてきているのではなく、すべて「被害者」の idea から生じてきているということの反映だ。

試みに、

「岡本太郎が示した芸術について」

と議題を示してみたとする。すると、岡本太郎の美術に「被害者」はあまりにも存在しにくいから、この話は盛り上がらない。

「もう岡本太郎はいいでしょ、時代的にもうオワコン」

と、無条件に「不毛」の一撃が示されて終わりになる。

あるいは、

「えー、わたし岡本太郎さん、すっごく好きなんですよ。初め、観たときすっごいびっくりしちゃって」

と、「かわいい」の一撃が示されて終わりになる。

あるいは、

「あ、わたしの知りあいというか、ゼミの先輩たちが、研究テーマにしていました。けっこうそっち方面の研究で有名な人たちらしくって」

と、徒党の気配が示されて終わりになる。

あるいはさらに強引に、

「なんつーかさあ、岡本太郎のせいで、日本の芸術って余計に狭くなったよね。けっきょく商業主義になっちゃって、その後の芸術家たちは生きられなくなったんだよ。しょせんブルジョワジーだよね」

と、無理やりにでも「被害者」を持ち出してきて終わるということもたまにある。

つまり、目の前にひとつの実物なりを置いて、

「なんだろうね、これは」

「そうっすねえ、はあ」

と、まともにものを言おうとすることに取り組めないのだ。

目の前にあるものについて、「大切なもの」のあるやなしやに向き合うことができない。

不毛革命の子が「大切なもの」に向き合うことはどうしてもできないだろう。

万が一、目の前のものに「大切なもの」があったとすると、対照して、自分のすべてが「不毛」だということがバレてしまう。

そのことが耐えがたい屈辱だったからこそ、不毛革命は成された。それを今さら、屈辱にまみれるわけにはいかない。

「被害者のことを考えろ」

人々が住むところに爆弾を落とした場合、「被害者のことを考えろ」となるし、そこに役には立たない千羽鶴を送りつけることについても、「被害者のことを考えろ」となる。

「送り付けられた側は迷惑でしかないだろ」と、その被害者を示すことですべての話は初めから満了している。やがてこの違和感のある千羽鶴も「千羽鶴爆撃」と揶揄されるようになるだろうか。

ともあれ、現代のネット世論はすべて「被害者」から発生しており、その議題はそのままただちに「被害者のことを考えろ」と結ばれて満了している。

なぜこんにちにおいてネット世論はそうして「被害者」が始まりから終わりまでを占めているのか。

それはやはり、不毛革命以降の現代においても「大切なもの」の権威を消去することはできず、大切なものが「あった」、「あったけど奪われた」と被害者の立場を採ることで、唯一まともな足場が得られるからだ。

アミヨたちは「大切なもの」を根絶やしにし、その革命において加害者のはずだが、各自が自分だけはそれの「被害者なんです」と言い張ることをもくろんでいる。

＊＊＊

たとえばあなたが、目立ちたがりで、ダンスをかじっていたとする。そのパフォーマンスは、未だショーと言えるほどのものではないにせよ、あなたとしては「けっこうやっている」つもりのものだった。同時に正直なところ、「本当にすごいやっている人には、追いつけっこないというか、なんでそこまでやれんのって、わたしにはそこまでの情熱はないな〜」と半笑いでもある。「いちおう、周囲に迷惑かけないぐらいにはちゃんとやるって自負があるけど」。

もともと、一種のスターになってちやほやされるということに願望があったが、やればやるほど、そのことは遠くてとてもじゃないが届かないということがわかってしまう。もっと本気になって取り組めば別かもしれないとも思うが、「わたしそういう、マジになって、ダサくなってまでやりたいタイプじゃないし、正直、あそこでこれ以上、人間関係に深入りしたくないんだよね。けっこう育ち悪い人も多いし」と思っている。「前に、資料見せられて、四時間ぐらいああでも

ないこうでもないってディスカッションさせられたとき、マジできつかったもんな〜。そこまで白熱できるの、正直わっかんないわ」。

一方で内心、

（わたしけっこう胸あるし、そもそもスタイルいいから、エロい恰好してりゃ、それだけでいちおう舞台でも注目は浴びるんだよね。それするたびに実際にファンが付くし、それはそれで気分悪くないんだよな〜）

（でもそういうことしていると、そのときは気分よくても、後になってけっきょく病むんだよね、自分自身が）

とあなたは知ってもいる。

このありふれた状況に、大きなアクシデント、大きなトラブルが起こる。

あなたは、お酒を飲み過ぎた日の帰り道、千鳥足が車道へふらふらとはみ出てしまい、交通事故に遭ってしまった。それで、歩けないわけではないが、激しい運動はもうできないというほどに足を傷めてしまった。麻酔から覚めたあなたは病院のベッドで医者からそのように報告され、ゾッとすると同時に、

（あちゃー、何やってんだわたし。ほんと、ダッセぇ）

と嘆かわしく思った。

（うわー、マジ最悪。誰だよあの飲み会誘ったのクソが。あー、タイムマシンに乗ってあの日からやり直してー）

（自己責任だって、わかっちゃいるけれど、うわーなんかこんなのマジ受け容れらんない）

あなたがそう内心で愚痴っていたところ、連絡網が行き渡り、ＳＮＳでダンス教室の講師があなたの事故と損傷のぐあいを報告した。もちろんダンス講師はそのことについてあなたに了解を取って話を進めている。

ツイートいわく、

「危険運転を心の底から憎みます。Ｂチームでフロントを務めていた〇〇さんが交通事故に遭ってしまいました。まだ入院中で、ドクターの診断では足の神経を傷めており、激しい運動には差しさわりがあるかもという見込みだそうです。まだ今後のことはわかりませんが、とにかく一刻も早い快癒を祈ります」

ありがたいことに、ダンス講師はあなたの入院費についてのカンパも申し出てくれた。

「〇〇さんの今後については、まだ続報はありません。よいニュースを祈るばかりです。つきましては、〇〇さんの復帰と励ましのために、入院費のカンパを募ります。余裕のある方は何卒ご協力ください」

そこから集まってきた金額を報告されたあなたは、

「えっマジ！？」

と声を出して驚いた。「みんな早く〇〇に復帰してほしんいだよ」と講師は言う。

講師のツイートはそれぞれにリツイートされ、付随して「ありえん、危険運転とかマジ許せんわ」というつぶやきも散見されだす。ff 外から、というツイートも混ざってきて、「わたしの父も交通事故で他界しました。加害者の方は責任を取ってくれましたが、失われたものは戻らないんですよね」という逸話が投下される。

誰かのアカウントに動画がアップロードされ、「わたしこのときの〇〇さんすっごいカッコよかって好きだった……事故で引退とかほんと悲しいので、復帰を祈っています！」。そうするとやはり ff 外からという但し書きがついて、「すごく上手で見とれてしまいました、アイドルでもやっていけそうなぐらいスタイルいいですね。ご快癒をお祈り申し上げます」と書かれる。

あなたはその動画を観て、

（あ、これ、一番ありえないぐらいエロい恰好していたときのやつだ。今見ると若いな〜）

と思っている。

一部には、そのダンス教室と関係ない部外者からも、「ご迷惑でなければ」と入院費に向けてのささやかな寄付があったそう。

あなたがＳＮＳに、

「みんなありがとう。いろいろやらかしましたが、いちおう生きてます」

とツイートすると、そのツイートには大量のファボがつき、

「生きてた！」

「早く戻ってきてください！」

と熱烈なリプが無数についた。

あなたはふと思いつき、病室と病院食を動画で撮影する。

「今、こんなんでーす。足は正直、痛いだけで、まだまともに動かせる感覚ないです」

もう退院も近いというころ、友人たちが見舞いに来た。ひととおり「久しぶり！」といってはしゃぐものの、「それでけっきょく、足どうなん」という話になる。

「うーん……」
「みんな心配しているというか、スゲー気になっているから、ちょっと動画にして報告してやってくれん？」
「あ、それいいかも。逆にそっちのほうが割り切って話せるかも」
「じゃ、ちょっとおれスマホで撮るわ」
「うん。あ、ちょっと待って待って。ちょっと髪型とか直していい？」
　あなたがあくまで見栄えを気にすることに、周囲はドッと陽気な笑い声を立てる。
　ベッドに座ったままでうまく作業できないあなたに代わり、誰かが髪の毛を整えてくれる。ついでに後輩の女の子が、「わたしのでよかったら」と、少し顔にお化粧もしてくれる。
「なーんか、暗く映っちゃうな」
「ライトの加減じゃない？　誰か、〇〇ちゃんを照らしてやってよ」
「あ、じゃあわたしスマホのライトで照らします」
「あ、そうそう、こんな感じ。すごい見やすくなった」
「それじゃ、いくよー」
　髪型と化粧を整えられ、あなたはカメラとライトを向けられる。周囲の人は当然静かに押し黙る。あなたが何を話すものか、固唾を呑んで聞き入っている。
　このときあなたは、忘れているが、もともと目立ちたがりだった。一種のスターになってちやほやされるという願望があった。
　その願望はあなたにとってウソではなかった。
　撮影が始まり、
「どうも、〇〇です。お騒がせしてすいません。ご心配をおかけしましたが、無事、明後日には退院です。まだしばらくは松葉杖ですけど。その後、リハビリとかになんのかな。たぶんそうなります。看護師さん？　療法士さんだっけ、が説明してくれたんだけど、正直あんま覚えてない」
　あなたは普通に話しているつもりだったが、自分の知らない感情がせりあがってくる。
「足があれなんで、ダンスは正直、ちょっと無理そうというか。無理そう、というか……」
　周囲はエッと思い、ますますあなたの様子に食い入る。
「あえて言うなら、ダンス、やっていたかったです。本当に、やっと、自分が打ち込めるものを見つけたのに。もっとずっとやっていきたかった。そういう言い方で、許してください。みんなのことが大好きでした。みんなと踊っているときが、わたしずっと大好きでした」
　あなたは膝に掛かっている布団を両手でつかみ上げ、大きな声をあげて泣き始める。撮影者らは、
（えっ、おいどうする）
　と動揺するが、
（いや、最後まで聞くしかないだろ）
　と撮影は続行される。
「あの、事故なんで、わたしも不注意だったんで、誰が悪いということはないんですけれど。誰をうらむものでもないんですけど。今はただ、悲しいです。退院しても、何をしたらいいかなんてわからない。いつもどおり、スタジオに行くつもりのわたしが残っていて、わたし、どうしたらいいか」
　胸が詰まってたまらなくなった一人が、
「あの、あのさ。どうなるかわかんないけど、何かの形で〇〇が一緒にやっていけるように、何か方法を考えよう。おれたちも何か方法考えるからさ。スタジオに来たらいいじゃん。みんなもそれでいいよな？」
　周囲は無言でうなずく。
　撮影者は撮影を打ち切ろうとするが、あなたはその気配を察して、
「あの、すいません、お見苦しいところを。泣きわめいてしまって。今回のことは、本当にみなさんに助けられました。本当に本当に、ありがとうございます。復帰はどこまで出来るかわかりませんが、とにかく、挫けずにやっていきたいです。また、元気になったら改めて報告します。ありがとうございました」
　あなたが低頭して、撮影はここで終了した。
　あなたはその後、松葉杖でスタジオに挨拶もいくし、リハビリの様子を動画に撮影してアップロードもする。一連の動画は、動画サイトのひとつのチャンネルにアップロードし、「こうしてみなさんに報告することで、自分を逃げられなくしてがんばっています！」
　とあなたの笑顔が説明文に添えられている。「絶対に舞台に戻ってやる！」とサムネイルに陽気なゴシック体の文字。胸をはだけて汗ばみながら続けるリハビリの様子に、視聴者からは、「なんでそこまでやれるのか、〇〇さんの情熱を尊敬します」というコメントがつく。

一件以来、あなたのファンだという後輩群が、「〇〇さんがカッコよかったシーン詰め合わせ」という動画を編集作成した。その動画は、あなたのチャンネルにアップロードされるのみならず、他のプラットフォームにも輸出されて閲覧される。

他のプラットフォームで閲覧されると、

「エロい」

「エッッッッッ」

「Ｆ以上あるな」

「即ハボ」

と評され、

「これ誰」

「〇〇とかいう、いま Youtuber でやっている人だろ。もともとダンサーだったけど、事故で足をやられたから、そのリハビリしているって」

あなたは自分のチャンネルに、

「湯治も兼ねて、△△ちゃんと□□温泉旅行！」

という動画を上げた。

その動画について視聴者からは、

「〇〇と△△の絡み、正直尊いわぁ」

とコメントがついた。

動画説明文には、△△の個人的なチャンネルＵＲＬも貼られている。

△△もダンス関連の動画を上げているが、△△が某日アップロードした動画のサムネイルには、それとは異なる尺と画額が示されている。

サムネイルには、視聴者にわかりやすいようにと、それぞれに色彩と角度をつけたゴシック体で、

「突然ですが」「わたし、性的虐待を受けて育ってきました」「最悪……」「親ガチャはマジである」

と書かれていた。

数週間後、〇〇と△△は「コラボ」の動画をアップロードする。

サムネイルには、やはりゴシック体で、視聴者に内容がわかりやすいように、

「セクハラ告発します」「芸能界だけじゃない」「女としては避けられないよね……」

と書かれていた。

＊＊＊

設定上、ダンスを「かじっていた」あなたは、そこに「大切なもの」を見つけていたわけではなかったはずだった。にも関わらず、足を傷めて以来、どこからかあなたはそこに大切なものが「あった」ということにすり替わっている。そして十中八九、このときのあなたは、過去そこに大切なものが「なかった」ということを忘れているし、そのことをまともに思い出すことはできない。

大切なものが「ある」として、その実物を示して活動することは、きわめてタフで困難を極める。「大切なもの」を、なんとなく感じることは誰にとってもありうることだとしても、それに触れるということは急にむつかしくなり、それを掴むということはさらにむつかしくなる、さらには、掴んだそれを形にして示すということは破格に困難だ。

一方、大切なものが「あった」として、それを奪われた被害者として活動することは、いっそ危険なほど容易だ。

たとえば一枚の絵を描いたとして、そこに「大切なもの」をあらわすというのは、とてつもなく困難で、けっきょくは自分のすべてを投げ込んだ生涯のワークになってしまう。

けれども、何かの「被害者」が、自分の失ってしまったもの・奪われてしまったものについて一枚の絵に描くことは、容易に注目を集めることが出来てしまい、すぐに個展を開くことが出来てしまい、「大切なものがあったんです」と言い張ることが出来てしまう。

だからわたしは、何らの被害者でもない者として話すことを選びたい。道義においてではなく、より単純な、もっと困難なことに取り組みましょうよという意志において。実際わたしは何の被害者でもない。わたしは大切なものが過去に「あった」という不確かなことに拠ってものを言うのではなく、いついかなるときも、いまこのときのわたしが「大切なもの」に届いて話すという不遜さを最低限の矜持としたい。

もしあなたが、あえてアミヨを自ら始めたいというなら話は簡単だ。同様に、アミヨを始めた者・アミヨをやっている者を見つけるのも簡単だ。

①「徒党」を組み

②「かわいい」を置き

③「被害者」とする

これだけで済むのが「アミヨの始め方」だ。

たとえ飲み会ひとつでも、よくよく観察すると、「徒党」は「かわいい子」を囲っており、話題は「おれさあ、○○に、××の始末をお前がつけろって言われてんだけど、マジありえなくね？　なんでおれがやらなきゃいけないわけ、おれマジ被害者なんですけど」「あれってさあ、向こうが勝手に動くから、こっちが動きづらくて、ムード悪くなってんじゃん、あっちの人らマジ空気読めなくない？」というような被害者側としての切り口をよく見せている。

わたしは万事の被害者を軽視しているつもりはない。そうではなく、こうして大切なものが「あった」という論法を利用することで、無制限に被害者が湧き続け、本来の被害者まで薄められてないがしろにされるということを当然に危惧しておきたい。

ともあれ、ネット世論とアミヨ、現代を支配した不毛革命の始まりはこのように説明される。そしてこの実物はわれわれの周りにいくらでも見つかるものだ。あるいはよくよく見ると、この実物しかほとんど見つからないのじゃないか、と憮然としたくなる向きさえある。

ひとつひとつが露骨なアミヨでなかったとしても、その手前、偽装された姿として、「徒党意識」を持っており、「かわいい意識」を持っており、「被害者意識」を持っているということがままある。実際にはほとんどが、この“偽装されたアミヨ”、“準アミヨ”の形でわれわれの周囲を取り巻いている。

「大切なもの」が根絶やしにされたあげく、その中で自ら絶対的なこころで「大切なもの」を掴み続け、それを示し続けるなど、日常の領域ではまったく不可能なことだ。だから誰もが潜在的に準アミヨとして活動が進んでしまう向きがある。準アミヨといっても、その挙動原理はアミヨそのものとまったく変わらず、その表れが露骨ではないというだけでしかなく、ふとしたことで純正のアミヨに転じてしまう。

「思し召し」とこころの違い

ここまで幾度か、揶揄をこめて「思し召し」という言い方をしてきた。揶揄を取り除けばそれは「思う」ということだ。ウェブ上で散見するスラングで言えば「お気持ち表明」に近いだろうか。

「思う」ということだが、「思う」ということと「こころ」は何が違うのだろうか。

ここに若者Ａと老人Ｂがいたとする。そして教育の方法について一般的な議題があったとしよう。たとえば、教育に関わって体罰は肯定されるべきか否定されるべきか。

若者Ａはこう言う、

「体罰とか絶対ありえない。ふつうに暴行罪として告訴するべき」

老人Ｂはこう言う、

「言うだけではわからない子もいる。どこかで身に染みてわからせるのに体罰は絶対必要」

若者Ａは教育に体罰は絶対ＮＧだと "思う" 、老人Ｂは教育に体罰は絶対必要だと "思う" 。

二人はお互いのことについてこう言う、

「昭和脳の老害って、ほんと自分の意見が通ることしか考えないよな」

「現実知らん奴が、腑抜けの自覚もなしに、自分が通用すると思っているんだろうな」

若者Ａは老人Ｂのことを「昭和脳の老害」と "思う" 、老人Ｂは若者Ａのことを「現実を知らん腑抜け」と "思う" 。

ここであなたの直観に問うが、この若者Ａと老人Ｂは、どちらも「こころ豊かな人」だろうか。あるいは若者Ａだけがこころ豊かな人か、あるいは老人Ｂだけがこころ豊かな人か。

「給食をぜんぶ食べるまで昼休みなしとか、そういう教師って絶対ガイジ入っているよな」

「好き嫌いを振り回して生きて自分はＯＫとか、将来絶対クソみたいな大人になるわ」

それぞれに言っていることはわかるが、どちらが正しいというようなことはさておき、この両者は「こころ豊かな人」か。

アミヨにはこころがない。比喩ではなく、本当にこころという機能と現象が「無い」のだ。

こころに触れたことがなく、こころを与えられたことがないので、こころそのものが無い。

人は、こころを持っていなくても「思念」は持つ。「思い」は持つ。ただしその「思い」は当然、こころとは無関係なものだ。こころは無いのだから。

自分のこころに関係なく、誰かのこころにも関係ない、思念・思いだけが示される。

この素っ頓狂な感触を、それらしき語感に当てはめるなら「思し召し」がふさわしくなってしまう。

若者Ａは、体罰は絶対否定という思し召しだ。

老人Ｂは、体罰は絶対必要という思し召しだ。

若者Ａは、Ｂについて昭和脳の老害だという思し召しだ。

老人Ｂは、Ａについて現実を知らない腑抜けだという思し召しだ。

この「思し召し」はどうなるだろう。もちろんどうにもならない。

どうにかしようとするなら裁判にかけるか立法府の投票にかけるしかない。

体罰は教育として違法です、と裁判官が判決するかもしないし、体罰は教育として合法です、と立法府が法律を定めるかもしれない。その法律は違憲かもしれないが、裁判官は合憲という判断を下すかもしれない。

ここであなたは必要な知見を得なくてはならない。若者Ａと老人Ｂでは平行線で結論が出ないのに、どうして裁判官Ｃは結論を出すことができるのだろうか。

それは、裁判官Ｃは権力を持っているからだ。司法行政権というパワーによって、力ずくで彼の結論を押しとおすことができる。

パワーというのは比喩ではない。英語で権力のことを Power という。

同様に、議院は法律なり条例なりで結論を出すことができる。それだって権力を持っているからだ。

若者Ａと老人Ｂは権力を持っていないので、互いの「思う」ことの違い、その平行線に結論を出すことはできない。

自分で議員に立候補するか、自分と同じことを「思う」という議員候補者に投票するしかない。自分と違うことを「思う」最高裁判事には不信任の×印をつけるしかない。

このように、「思う」ということは、実はこころのやりとりではない。力のやりとりだ。

合法的な力を持っていない者は、自分の「思う」ことを、他人の「思う」ことに上回らせて押しとおすことはできない。少なくとも合法的にはできない。

違法的な力を用いる場合、その力が相手より勝るのであれば、自分の「思う」ことを、相手の「思う」ことに上回らせて押しとおすことができる。

戦争などがその代表例だ。

（ただし、戦争はそれ自体は不法行為ではない。さらに、そもそも軍事力以上に人類のパワーは存在しないので合法も不法も二の次になる）

アミヨにはこころが無いので、自分の「思う」ということをもって、人とやりとりしようとする。それ以外にやりとりする材料がないのだから致し方ない。「こころ」でやりとりするということを根本的に知りようがないという背景がある。

アミヨは自分の「思う」をぶちまけるだけのやりとりをするしかなく、けっきょくそれを「会話」だと思わざるを得ない。

だからアミヨはもともと、こころある人に嫌われて、避けられるようになっていくが、自分が嫌われるのがなぜなのか本当にわからないので、自分のことを「コミュ障」なのだとする誤った認識で状況をごまかす。

このことは思いがけず、アミヨが嫌っている、頭が固くなった老人とよく似ているということになるのだ。これまで無念ながら、満足して誇れる自分をいまいち生きてこられなかった老人は、もうそれをやりなおす時間は与えられていないので、これまでの自分を「正しい」と硬直させて固めるしかなくなっている。だから老人の頭は固く、こころも今さら緩めることはできない。「今さら」ということじたいが老人にとっては致命的な恐怖になりうるのはやむを得ないことだろう。今さらここまでの自分の七十年間が間違っていたとか誤りだったとか、仮に知らされたとしても老人にはもうどうしようもなく、そのときには絶望に砕け散るだけしかない。このことは、われわれが容易に向き合えるようなことの範疇を超えてしまっている。

だからこの場合の老人も「こころ」という機能と現象は失っている。そして、こころはなくても思念は持つ。

こうしてこの場合の老人も、アミヨと同じ、自分の「思う」ということをひたすら相手にぶちまけるというやりとりをするのだ。

先の例で、若者Aと老人Bは、それぞれ自分の「思う」ということをひたすらぶちまけているだけだ。彼らはそれを会話だと思っているし、それを議論だと思っている。

彼らはよく「絶対」といい、それを言わなくてもすべての思うことに内心で「絶対」が付属しているのだが、このことは彼らが絶対的なこころを持っていることを意味しない。

逆だ。

若者Aと老人Bの「思う」ことは対立している。

もし彼らに絶対的なこころがある場合、彼らのこころは無言でこう云っている。

「この若者が得てゆく、大切なものに栄光がありますように」

「この老人が持っている、大切なものが称えられますように」

それぞれに「思う」ところは違いがあるが、「大切なもの」に関しては、互いにそれがありますようにと励ましあっている。その「こころ」については互いに認め合っているし、尊びあっているのだ。

それぞれに「思う」ところは違うけれど。

それで、

「おい若造」

「なんだジジイ」

「体罰ぐらい必要なときもあらぁ、そんなことがわかんねえか青びょうたん」

「耄碌してんじゃねえぞ、手ェ出さずに詰め切るほうが根性いるってことがわかんねえか」

それぞれは、思うところは違うし、自分の思うところについては容易に引き下がりはしないが、それぞれ内心でこう思っている、

（このご時世に、骨のある奴だなあ、とにかくうまいことやれよ、だれかいい女でもついてやれよな）

（ちっ、ああいうジジイが現場にいてくれたらいいんだがなあ、とりあえず長生きでもしてろジジイ）

つまりお互いに思うところは違っても、こころは互いに敬愛しあっている。意見の相違があって、長話できる間柄ではないけれど、お互いにお互いを見かけると、二人とも「やれやれ」と憎らしく思い、同時にお互いのことが嫌いではない。

二人はのびのびやりあっているが戦争には向かっていない。

それは二人とも、絶対的なこころを持っているからだ。

ところであなたは、教育に体罰は必要だと考えるだろうか。それとも、やはり体罰はどこまでもNGだと考えるだろうか。

あなたの考えはどうだろう。

教育と体罰について……

こうしてあなたが問われたとき、あなたはネット世論に伺いを立てながら、

「わたしは体罰は、……、だと思います」

と、こころと無関係な「思う」ことを言いださざるを得ないが、そのことは実はけっこうあなたにとって不本意なことではないだろうか。

アミヨたちがあなたに何を仕掛けているか気づくだろうか。

アミヨたちは、あなたの「こころ」がどこかへ向かうことをつぶしたがっているのだ。

アミヨたちにはこころがなく、「思う」ということしかできない。

だからあなたに、「どう思いますか」とアミヨたちは訊くのだ。

あなたのこころがどこかへ向かうということを失い、何もかもが「思う」で塗りつぶされるよう、あなたに工作を仕掛けてきている。

アミヨはあなたを「思し召しのマシーン」にしたがっているのだ。こころがどこかへ向かう人ではなく、アミヨたちと同じ「思し召し」のやりあいをする物にしたい。

あなたはあなたのこころとその向かう先をこそ守るべきだとわたしは思う。

絶対的なこころとは、また「大切なもの」とは

いまからここに、まったくわけのわからないことを書き話す。全体の構成として必要なことなのでやむをえず書き話すという具合だが、このことは本稿の把握じたいには必要なことではないので読み飛ばしてもかまわない。また、どうせ精密に理解するのはとうてい不可能というようなことを書くので、その書きようも相応して投げやりなものに留めておく。この部分を精密に書き話そうとすると、この部分が本稿の全体よりもはるかに大きくなってしまうので、手短に、「何のことやらさっぱりわからない」という前提で殴り書きする。それでもこの段は全体の構成として入れないわけにいかないところなのだ。

絶対的なこころは、絶対的な「思い」などではない。絶対的なこころとは何かというと、「魂」に百パーセント向かっているこころだということになる。こころはわれわれにとって「現在」のものだが、「魂」はどうも時間軸上で「未来」にあるようだ。それは 0.3 秒後の未来でもあるし、同時に三年後の、三十年後の、あるいはさらに果てなき未来でもある。そもそも魂には時間という尺度じたいが存在していないので、それはいかなる過去でもいかなる未来でもかまわずにはたらくものだ。さしあたりわれわれは、多く未来に向かうことを考えるはずなので、ここでは魂のはたらきを「未来に触れる」という点で捉えておく。

われわれのこころは、古い言い方でいえば気魄であって、より正しくは気魄という全身の機能の中心、そのセンターのありようを「こころ」と呼んでいる。「心」はそれじたい中心・重心の意味を持つからだ。気魄のセンターとしては単純に心臓と思ってもらってもだいたい間違っていない。

そして気魄はそのセンターから末端に向かって「出て」いるのだが、魂は反対の向き、身体の先端から中央へ「入って」きている。このとき魂の "入ってくる" 身体のセンターは横隔膜にあるらしい。魂は身体の各先端から「入って」きているのだが、特にその先端は「指先」においてはたらきが大のようだ。そして魂は時間軸上で未来にあるので、指先は「未来に触れている」ということになる。ただしこのことは、概念としてはそうであっても、全身がそこまで何の呪縛・滞りもなく解放されていて、かつ中央と末端とで膨大な出入りを起こしてもそれを余裕をもって受け止めきれて損傷しないだけ魂魄が鍛えられて育っているということが前提条件なので、まずそのような全身と精神の状態に至っていると想定することは非現実的だ。

ともあれ、現在と未来のことを考える。われわれは「現在」を押し出していってそれを未来に到達させるふうに一般的に思い込んでいるが、現在を押して進めたとき、それがどこまで行こうとも、そこまで行ったときにはすでに「現在」なのであって、未来に触れて未来に向かっていることにはならない。現在たるこころを押し出したとてこころを未来に向かわせることはできない。こころを未来に向かわせるにはどうすればいいか。唯一、魂が先に未来にあるので、その魂にこころを百パーセント向かわせること、これによってこころは「直接未来に向かう」ということができる。このときこころは相対的なものでなくなり絶対的なこころとなる。なぜ絶対的なこころになるか。それは、こころが現在にありながらすでに未来に触れて百パーセント向かってしまっている以上、こころは現在のものと相対化しえないということだ。企業に内定をもらった就職活動生が、その企業に就職しようと百パーセント向かってしまったら、彼は就活生でありながらすでに就職活動のうちになく、ほかの現在の就職活動生たちと相対化しえないだろう。このとき彼の就職活動は絶対化されたということになる。それと同じように、先に未来にある魂に触れてそこにこころが百パーセント向かうとき、そのこころは「絶対的なこころ」となる。

そしてこのとき、彼のこころは当たり前に「生きて」いるのだが、ただ生きているというだけでなく、未来の魂から「命」を受けることになる。彼のこころは生きながらにして命を得るのだ。

いちおう最後まで話しきるならこうなる。では「大切なもの」とは何か。「大切なもの」とは、こころが百パーセント向かう先のもの、ということになる。こころが百パーセント立ち止まるものではなく、百パーセント "向かう" 先のものだ。その百パーセント向かう先が魂であって、魂は未来にあるのだから、その未来にある魂はそもそもどこに向かっているのだろうということになる。0.3 秒後であれ三十年後であれ、あるいはさらに果てなき未来であれ、魂はどこへ向かっているのか。

魂をどこに向かわせるかということを、現在のわれわれが決定することはできない。魂は未来にあるのだから、それは

先に決まってしまっている。魂より遅れてあるわれわれのこころが、魂に先んじてその行先を決めたり選んだりすることはできない。われわれのこころより未来に先行している魂がどこに向かっているのかはわれわれは知りようがない。魂がどこに向かっているのか、現在のこころたるわれわれは「わからない」と答えるしかない。ただ、魂がどこに向かっているのかはわからないが、その魂にこころを百パーセント向かわせるとき、魂から「命」を与えられるので、その体感をそのまま言うと、魂は「大切なもの」のところへ向かっていると言わざるをえない、ということになる。「大切なもの」が何なのかはわからない。ただ、それが「大切なもの」だということだけが、現在のこころたるわれわれには感得されるということだ。

このように、どう書き話してもこのことは「ちんぷんかんぷんだ」ということになる。それでもこの段は必要だ。このことはあまりにちんぷんかんぷんが過ぎるので、深入りしなくても使えるよう、本稿での表現は「絶対的なこころ」「大切なもの」とした。本稿はネット世論に別れを告げるためのものなので、魂だの命だののことはここで詳しく知り抜く必要はない。指先が未来に触れているのであれば、ひょっとしたらあなたがわたしの手を取ることで、あなたの手もわたしの手が触れている未来に行くのかもしれない。そういうちんぷんかんぷんの話だ。

あなたに向けて、アミヨに向けて

長大な話をしてきたが、この話は遠いどこかの話ではなく、あなたの手元にある話だ。あなたの手元の端末にすぐあることの話で、あなたはその実物にアクセスするのに、ほんの指先をこする労力しか必要としない。

あなたに向けて、より直接の、具体的なことを話しておきたい。あなたは「どうすればいい」のか。あなたがどうすればいいかを、シンプルに知って使いこなしてもらうために、ここまでの話をしてきた。

ネット世論およびその飛沫など、ウェブ上にいくらでも見つかる。直接の周囲にも見つかる。それを見かけるたびにあなたは、

「おっと、“大切なものがない人たち”だったな」

と思え。残念ながら事実なのだから、その事実に即して捉えるしかない。

「こういう人たちは、ネットを見ている人の中でも、さらに400 人に 1 人ぐらいだ」

これも残念ながら事実だ。彼らは自分たちのことを多数派と思っているが、それはとんでもない錯覚であって、ほとんどの人はアミヨ活動を生涯に一度もしない。

さらにあなたは、

「プラットフォームごとにアミヨが違いすぎでしょ」

と思え。これも事実なのだからしょうがない。Youtube と５ちゃんねるではアミヨたちの言うことが違いすぎて、何が輿論だよと馬鹿馬鹿しくなってくる。

とはいえ、

「拡散の担い手か」

と思え。

「有り余る不毛な時間を持っていることに関しては、彼らには誰も勝りようがないものな」

と思え。

商売上、イメージの保護が必要な人は、「注意」あるいは「警戒」もしろ。

そして、すべてのレスなりコメントなりが、

「不毛そのものを押し広げていくだけだな」

と思え。そのとおりのことを目撃しろ。彼らはそのことじたいを自らの活動としていると思え。事実だからしょうがないところだ。

「不毛だから、かわいい子を探しまわっているな」

と思え。必ずそのとおりになっている。

そしてかわいい子の映像を観たら、残念だが、

「かわいいけど、『大切なもの』は無いんだな」

と思え。事実だからやむを得ない。

ついでにかわいい子に対しては、

「未来がありますように」

と祈れ。

アミヨの矛盾について、言わなくていいが、見ろ。

「膨大なネット世論があるけれど、アミヨさんにとってはこれも『大切なもの』ではないんでしょ」

「アミヨさんは自分の勝利と正しさを言っているのに、なぜそんなに卑屈なの」
「みんな言っている、というふうだけど、アミヨさんはその"みんな"と会わないんでしょ。会わない"みんな"って、あなたにとって何なのかしら」
　そして、
「わたしもアミヨ始めるかぁ……いや、始めるわけないわ」
　と笑え。
「進撃の巨人」を見たら、
「徒党を組んでいるな、かわいくしているな、被害者になっているな」
　と思え。調査兵団は徒党だし、女の子はかわいくしているし、他のキャラもかわいくしている。そして主人公も人類も「被害者」になっている。
「鬼滅の刃」を見たら、
「徒党を組んでいるな、かわいくしているな、被害者になっているな」
　と思え。鬼滅隊やらその学校やらは徒党だし、妹は可愛くしているし、主人公も妹も被害者になっている。
　大量のツイート、レス、コメントは、
「スーパー思し召し大会だあああ」
　とでも思え。何が悪いというわけではない。ただあなたはあなたのこころが向かうところを失うべきではないのだ。
　スーパー思し召し大会の出場者は、みんな、
「徒党を組みたがっているな、『かわいい』をやりあいまくっているな、あっちもこっちも『被害者』を始めているな」
　と視認しろ。
「あ、不毛革命だったな」
　と思いだせ。
　それでもあなたは、これまでどおり、ＳＮＳを使ったり、Youtube を見たり、「まとめサイト」を読んだりしていい。
　そこに「大切なもの」があるか無いか、ということを忘れずに見ているぶんには、あなたは不毛連邦には取り込まれない。
「自分の機能が『思し召し』だけになり、自分の一挙手一投足、声も姿もまなざしも、『不毛』を押し広げるだけのものになるというのは、恐ろしいことだな」
　と思え。
　あなたはＳＮＳにどんな投稿をしてもかまわない。不毛革命の子にならなければ、ウェブツールごときであなたがアホになったりはしない。
　あなたが忘れずにいなくてはならないのは一点、
「『大切なもの』を持っている人に出くわしたときに、ずっこけない自分でいないと」
　ということ。
「『絶対的なこころ』を持っている人に出くわしたときに、わたし自身からアミヨめいたものが出てくるようなことが、絶対にないようにしないと」
　ということ。
　ここまで、今度はこちらが"根こそぎ"だが、ここまでネット世論のアミヨを暴き立てて、見切ったからには、ネット世論というのも、もうあなたにまともに入り込むことはなくなるだろう。
　ネット世論はうじゃうじゃある。そしてどれも喧騒に満ちているが、今さら何かに「使えるか」というと、もう何ひとつ使えないものになってしまった。
　決して忘れてはいけないこと。不毛革命はいちおう成されたのだということ。
　あなたの手元の端末から閲覧できるのは、色んな人の色んなこころ、ではない。
　不明の誰かの、不明の思し召しだ。
　仮にこのことに深く入り込んだとして、最後に出てくるのは、
「自分がかわいいだけの人たち」
　だということを、うっすら知っておかねばならない。先に知っておかないと、いざそのときにけっこう面食らうところがあるから。
「大切なもの」がないということは、「かわいい」しかないということ、ひいては「自分がかわいい」しかないということなのじゃないか。本当にそれだけしかないものを、われわれは毎日大量に見ているのじゃないかと、どこかで知っておかなくてはならない。
　構造上、<<「自分がかわいいだけ」を躊躇なくぶちまけていい世の中になった>>とも言えよう、だから「革命が成し遂げられた」と何度もくどくどと言うことになった。
　どうかうっかり忘れることのないよう、そして忘れた隙にヘンなものがあなたに突き刺さることがないように。

どんなにかわいらしく見える女の子が、おしゃれな服を着て、胸元を見せていたとしても、何のためにやっているか、それは「自分がかわいいだけ」だとしたら、まるで悪魔みたいだと思わないか。あなたの手元の端末は、そういう場所から抽出したエッセンスオイルをネット世論としてあなたの心臓に届けてくる装置という側面を持つ。笑いながらも、あなたの心臓はそれを拒否しなさい。

最後に、アミヨに向けて。

もちろん、おれからアミヨに向けて言うことなんかないし、アミヨがこの話を、こんな最後まで読んでいるとは到底思えないけれど。

アミヨはおれに対して、「ムカつく」かもしれないけれど、本当は、自分がこの話にムカついていいかどうかさえ、自分ではわからないだろう。自分では自信が持てないから、徒党を組んで「ムカつく」って言ってもらいたいところだろう。

目の前に誰かがいたとして、その誰かが同級生なり何なりで、友好的だったとしても、何を話したらいいか、実は本当にまったくわからないのだ。

何をもって友人とすればいいのかわからないし、友人ではないだろと言われても、それも実はよくわからないだろう。

何も好きこのんで「思し召し」だけをぶちまけているわけじゃないのだろう。本当にそれしかなく、本当に他には何もないので、しょうがなしにその自分の「思し召し」をぶちまけているはずだ。

しゃーないよ、「こころ」がなければ理論上誰だってそうなる。おれだってそうなる。

いまおれが話しているこのことだって、お前のこころには届かないということを、おれは知っている。こころが無いんだものな、こころが無いんだからこころに届かないのは当たり前だ。

アミヨだけじゃなくて、いまは他の多くの人もそうだ。その点、アミヨの不毛革命はすごい成果を出した、「恐れ入った」と言いたいぐらいだ。

アミヨだってそんな革命をしたかったわけではなく、自分なりに正しいことを突き詰めたらこれになったっていうだけだろうけれども。

革命というのは全部そうだ。同胞を虐殺して国をボロボロにした指導者だって、自分なりに正しいことを突き詰めてそうなっただけだ。

単純に知っておくといいのは、こころを向けてもこころが応えてこない場合、こころを向けた側としてはとてつもなく不快だということだ。とてもじゃないが耐えられるような不快さじゃない。

おれはいま、アミヨのこころには届かないと知った上で、このようにしているけれど、これはおれがほとんど気の狂ったような奴で、すべてを自分の学門に捧げるのが当たり前になっているから、平気でいられるだけだ。

ふつうの人の場合、こころを向けたのに、アミヨから「思し召し」が返ってきたら、反射的に殺したくなるよ。それはしょうがない、アプリオリにある尊厳の機能だからしょうがない。「二度と顔も見たくない、本当にきしょい、絶対にわたしに近づけないで、許せないっていうか本当に生理的にムリすぎる」。

かといって、われわれは実際に反射的にブッ殺すわけじゃない。殺したくなるというだけで本当に殺さない。それは忍耐強く、健全で、ひたむきなことじゃないか。

どうして嫌われるんだろう、と悩むようなことがもしあるなら、こう丸暗記しておけばいい。「こころで応えず思し召しを返しているからだ」。逆のことをやられたらわかるよ。アミヨがこころを向けて、相手から「思し召し」しか返ってこなかったら、アミヨだって反射的に殺意が湧くよ。そのときは前もって言っておくけれどね、殺意を誇るな。殺意なんて、今どき誰だって、毎日あちこちで湧いているんだよ。おれみたいなハッピーの中を生きている奴は例外中の例外だ。「こころ」がどうやったら得られるのかはわからない。誰かのこころに触れ、誰かにこころを与えてもらうことでしか、こころは得られないということはわかるのだけれど、誰がこころを与えてくれるのかはよくわからない。

アミヨは、本当は、鏡で自分の姿を見るたびにゾッとしているだろう。自分が発した声を聞くたびに、本当はゾッとしているだろう。

自分がそこにいるだけで、自分が視線を向けるだけで、自分が声を発するだけで、そこにある何かが致命的に台無しになっていく、そういうキツさに、本当はこれまで直面してきているだろう。

ネット上ならそれが出ないから、ネット上が自分の棲み処になるのは必然的なことだ。

ウェブを通してなら、自分の姿とか目の色とか、表情とか、どんな声とか、どんな話し方とか、どんな呼吸している

とか、出ないもんな。ネット上でだけ自由闊達になるというのはわかるよ。

結果、ネット上で「思し召し」をぶちまけ続けるということにどうしてもなる。かわいい女の子のおっぱい画像とか、子猫のかわいらしい動画とかばかり見て、神経の惰弱化は果てしなく進んだだろう。数分ごと、どころか、本当に数秒ごとに、意識と集中力がフッ・フッと切れるだろう。一種の催眠のようなリズムで。もうそういう「体質」なんじゃないか、というぐらいにまで神経はやられ尽くしていると思う。

そのことを、嘆けばいいのか、嘆かなくていいのか、それも本当はよくわからないだろう。おれの言っていることに安心を覚えればいいのか、不安を覚えればいいのか、それだってよくわからないはずだ。ネット上で拡散を担い、たとえ十年間も「思し召し」をぶちまけあったとして、一人の友人も得ないということはさすがにキツいことだ。でもそれだって、嘆かなくてはならないのか、それとも嘆くべきではないのか、自分ではよくわからないはずだ。徒党を組んで言ってもらう・レスをつけてもらうしか何もわからない。

今や陽キャやらリア充やらも、アミヨと変わらない。本当は、鏡で自分の姿を見るたびにゾッとし、自分の発した声を聞くたびにゾッとしている。自分そのものが果てしなく「キツい」。だから強烈にキャラを着込む。強烈に「かわいい」をやりきる。Youtuber もインフルエンサーも、自分の姿と声にとてつもない加工を施している。自分そのものが果てしなく「キツい」。それなのにしかも、そのキツい自分が「かわいい」という原動力だけで動いているんだ。自分がかわいいだけのキッツい集団。こんなものキツすぎて、とてもじゃないがにわかに直面できるわけがない。

「大切なもの」を根絶やしにしてみんな平等にそうなった。革命の首謀者としてはアミヨは満足か。

唯一の言い方をしたらこうなる。アミヨが、神ならよかったのにな。神なら、こころではなく、思し召しだけを持っていればよかった。海が割れて、天の火が降れよという思し召しなら、すべてそのとおりになる。アミヨが神だったら思し召しだけでよかった。

でも地上の生を過ごし、そのまま死んでしまうのだから神ではないな。だからアミヨはけっきょく、神ならざる身で、自分を神だと詐称していることになる。思し召ししか示さないのだから神だわな。

そうして自分のことを神だと言い張るなら、マジもんの神がいたとしたら、「じゃあお前なんかにはこころは与えん、神だと言うなら思し召しだけやっていろ」と言うかもしれない。

まったくバカみたいな話、それでも何か唯一の可能性に近い話だと感じるのだけれど、「こころ」の始まりは、「自分は神ではない」という自己認識・自己宣言からだと思うよ。自分は神ではなく、神に近いものでさえない。神に近い人ランキングを集計したら、偏差値ではドベのところにいるかもしれない。

バカみたいな話、かつ大真面目な話。アミヨには思し召ししかないのだけれど、だからこそ神からは最も遠いのだと思うよ。アミヨは自分に「思し召し」しかないから、自分をどこか神に近い存在だと思ったのかもしれないが、それは単純な誤解だ。

神は人をこころあるものにしたはずなのに、それが神を詐称して思し召しマシーンと化したとしたら、神はただ舌打ちして、そいつを籾殻と一緒に火の中に捨てるだろう。

神の真似事はやめたら？　ひとつ明らかなことがあるだろう、手元の電脳通信端末と、その先にあるコメント欄やツイート欄やレスポンス欄は、<<あなたの思し召し投下窓口>>じゃないか。そして思し召しを投下しまくることでネット輿論を醸成し、こころを豊かにして生きていこうとする人たちを妨害・阻害・蹂躙しまくっていったじゃないか。今日だってなお執拗な、その残敵掃討をしているだろう。

自分が実は、「こころ」あるものなのかもしれないということが、逆に怖いことだと思う。こころは「大切なもの」を抱えることが出来るけれど、大切なものを「壊してしまった」ということも抱えてしまうからね。そのことはマジで怖い。それでも、そういう怖さを引き受けて、震えて地上を歩いていくものだろうとおれは考えている。

さよならアミヨさん、おれには終（つい）ぞ、あなたの思し召しと、あなたの言う「かわいい」がわからなかった。

あなたにも終ぞ、おれの言う「こころ」はわからなかったかもしれない。

そんなこんなで、お互いに別れを告げるときがきたようだ、どうぞお達者で。

お互いにせめて、なるべく健康で無事に生きていけるよう、そのことだけでもなるべく支えあって暮らしていきましょう。そちらネット輿論の国で、どうぞお元気で。

［さよならアミヨさん、ネット輿論に別れを告げるときがきた／了］

編集後記 by 九折

一人で書いているものに編集後記もへったくれもないとは思うけど、とりあえずお疲れ様。このページ、右下のページ数が１になっているが気にするな、Word で編集しているんだがこれ以上フッターをいじると何でか全体のレイアウトがバグるのだ、おれはこれまでに Word を思い通りに使えたことなんて一度もないぜ。

さあ今回の話、ネット世論を真に受けるのはやめましょうという話、ただそれだけ。ただそれだけのことにこんなに冗長に書き話す必要があるのか汗。いやいや、それがあるんだ（多分）。本当の構造を知らないと、その作用を根幹から断ち切ることができないから。

そして、その本当の構造というところまで手を突っ込むと、けっこう生々しい話になってしまう。ネット世論なんてみんな半分冗談のつもりでやっているのにね。冗談半分のつもりが、いつのまにか、何か別のものになってしまった。そういうことってあるじゃないか。誰だって冗談半分のつもりでパチンコ遊びを始めるのだろうし、麻薬でさえ初めは冗談半分でやってみるものだろう。

どうしても言わなくてはならないことは、ネット世論は残念ながら「大切なもの」を持っていない人たちが醸成しているようだということ。ネット世論の中にあなたの大切なものはない。むしろ逆で、残念ながら必ずネット世論はあなたの大切なものを破壊しにくる。怖いじゃねーか。

ネット世論が存在するという実態は、いまや誰でも知っている。あなたも知っている。でも、そのネット世論なるものを醸成している人たちの、姿やその声の響き、眼差しの色などは、見たこともなければ聞いたこともない。色んな人の色んな話があるように見えるけれど、それって「誰の話？」と訊くと、あなたは答えられない。当たり前だ。

あなたの話はあなたの話でなくてはならないし、あなたの聞いた話も「あの人の話」でなくてはならない。そしてあなたが「あの人の話」を大事に持つとき、あなたのいう「あの人」は、何か大切なものを持っている人なのだ。当たり前のことだけどね。ネット世論にはこれがない。誰の話でもなく、大切なものを持っている人の話をあなたが聞いたわけでもない。ここのところだけは正確に捉えていないと、あなたからネット世論の影響を切り離せない。

あなたが一本の映画を観たとする。それで、あなたが映画のレビューサイトを見ると、その映画は「名作だった」「感動した」と星印がたくさんついている。あなたはそれについて内心、「そうかなあ」と違和感を覚える。一方、同じ映画について５ちゃんねるのスレッドを見ると、「陳腐すぎるだろ」「モチーフは○○の使い回しだ」「この女優は監督とのコネだよね」「映画館で金を払ってまで観る価値ないわ」とコメントされている。それについてもあなたは内心、「そうかなあ」と違和感を覚える。

あなたの体験することが、すべてネット世論の評するとおりで寸分も違いがないのなら、それでいいのだけれど、まさかそんなわけがない。それで、その映画について実際にあなたの友人たちはどのように言うかというと、別にそんなにあれこれは言わない。映画ひとつについて友人たちと三時間もあれこれ話して盛り上がるかというと、そんなことはなかなかない。じゃあ、ネット上でレビューをやりとりしている人たちはどういう人たちなのかという話だ。

ネット上では、本当におかしなことが進行している。もうこのことは、単なる風物詩として看過できるような領域を超えてしまった。あなたが本来体験するべきことを歪めてしまう危険性を無視できない。無視できないどころか、すでにあなたの体験や、体験を得られるだけの素質を、さんざん破壊していると見立てるほうが妥当なぐらいだ。

たとえばおれが、誰か若い女性と出かけるとする。「サイゼリヤいこうぜ」とおれがその女性を呼び出したとしよう。するとその女性は「やった～　いいんですか」と応じる。断じて申し上げるが一ミリもウソじゃない。おれの友人でおれがサイゼリヤに誘ってよろこばない奴はいない。モスバーガーでも吉野家でもいいけど。もちろんおれがオゴってその人がよろこぶわけじゃない、正直にいえばおれはオゴっていないし、かといって割り勘にもしていない。別にそんなのオゴってもどうでもかまわんけどね。

おれは重度の喫煙者だから、ネット的に言うならいわゆる「ヤニカス」だけど、それで煙たがられるかというとそうでもなく、それどころか「この匂いが落ち着くんですよ」といって、わざわざ副流煙を吸いに来てはしゃぐ奴もいる（たくさんいる）。靴が泥だらけになったら「これ拭いておいていいですか」と許可を求められるぐらいだ。これらはすべて一ミリもウソじゃない。でもネット世論には決して「そういうもんだろ」とは書かれていないだろう。

仮に、あなたが若い女性だったとして、そして仮にネット世論に深く影響づけられていたとして。おれがあなたに「サイゼリヤいこうぜ」と誘ったら、あなたは激怒しないといけない。でも本当にあなたのこころは激怒するのだろうか。安くてうまい白ワインを飲みながら、辛味チキンを食べることがそんなに貧しいことか。女性であるあなたに対する重大な侮辱になるのか。靴が泥だらけになったからテキトーに拭いておいてくれとあなたに言ったら、それは重大なセクハラやパワハラになるのか。

おれは昔、丸の内の商社マンだったころ、よく夜中に六本木に置き去りにされ（部長がキャバ嬢とアフターしたあと、タクシーで帰ってしまうのでおれだけ置き去りになるのだ）、そこで客引きをしていた背の高いガーナの黒人に「お前、こないだも置き去りにされていたよな」と笑われた。アフリカンらしく本当に真っ黒の肌だ。おれはそのガーナ人に「日本に来て何年目ぐらい？」と訊いた。するとガーナ人は指折り数えて、途中で数字がわからなくなったらしく、エヘヘと笑った。「覚えてないやないか！　テキトーに生きとるなあミスターチョコレート」とおれは言って笑った。おれのやったことや発言したことは人種差別なのか。当のガーナ人はウヘラウヘラ笑っていたのに。

つい先日、おれが玄関先に立っていると、歩きスマホのお姉さんがやってきて、彼女は前を見ていなかったものだから、危うくおれと衝突するところだった。衝突はギリギリで回避され、お姉さんはなおもスマホをのぞき込みながら、おれに対して「舌打ち寸前」という気配と表情を示して去っていった。ひどい話だと思う。ひどい話だし、そうしたことはいくらでもあるけれど、そこに本当に「大切なもの」はあるだろうか。そそっかしいお姉さんなんてどこにでもいるだろうし、何か厄介で面倒な相手と LINE のやりとりでもして苛ついていたのかもしれない。それにしてもひどい話かもしれない。でも、そういうことって誰でもそれなりにあるじゃないか。そのありさまを撮影してウェブ上に拡散し、何もかもを貶めるふうに罵り倒す必要が本当にあるのか。それは「大切なもの」と「不毛」のうちどちらに分類されるだろう。おれは不毛の側を世界に広げようとは思わないし、そのお姉さんだっておれがサイゼリヤに誘えばよろこんでくれる可能性があるじゃないか。

世の中にはとんでもない人たちもいるし、とんでもないひどいこともある。あなたはそういうことに巻き込まれないよう、知識を持ち危機管理する必要があるが、それにしてもネット世論で知らされる「ひどい人」や「ひどいこと」のすべてをあなたが体験したわけじゃない。「煽り運転」のひどいニュースがあっても、あなたが煽り運転をされたわけじゃない。あるいはあなたが煽り運転をされても、「わあ、怖い」ということでサッと別の道に逃げただけで済んだかもしれない。大半の場合はそうなるだろう。

あなたのこころやあなたの思いは、あなたの体験によって構築されていくべきで、ネット世論で構築されていくべきではない。おれが青空の下で煙草を吸いながら、「誰か缶コーヒー買ってきてくれ」と言ったとして、あなたがそのことを心底イヤと感じるなら、あなたはあなたの感じるままに行動すればいい。ただ、本当は腰が浮きかけて、言われたまま缶コーヒーを買いにいきそうになるのを、ネット世論に引きずられて押し止められることのないように。ネット世論があなたの「大切なもの」を守ったりはしない、それぐらいは誰にでもわかっていることなのだから。

仮に、ここにさまざまなＳＮＳやコメント欄に書きこみを投下しまくっているＸさんがいたとして、あなたはそのＸさんのコメントのすべてを一冊にまとめた「Ｘさんコメント全集」を手に取って読みたいと思うか。その表紙にキスするか。またそのＸさんの実物に直接会ってその話を数時間ねっちり聞きたいと思うか。Ｘさんのコメントのすべてはあなたの行動決定の指針になると思うか。そんなこと思うわけがない。ではあなたはなぜネット世論に影響を受けなくてはならないのかという話だ。今回はそのＸさんを総じて「アミヨさん」と呼んだだけだ。考えてみればわかることだが、Ｘさんは、周囲に「あなたの話が聞きたい」と言ってくれる人がいないので、八つ当たりのようにネット上のコメント欄やツイート欄にそれをまき散らしているだけだ。誰にも「話が聞きたい」とは言ってもらえない人たちが大量の書き込みをしている。それがあなたの行動を支配する指針になるなんて馬鹿げたことだと思わないか。

平たく言って、ネット上に書かれている「世論」、その元になる細々とした言説は、ただ単なるウソというのもある。一番わかりやすい例でいえば、まともな恋愛経験のない人が、恋愛に関わるネット世論を作っている。正確に言うと、恋愛経験を表面上で重ねても、そこに「大切なもの」が得られなかった人が、恋愛に関わるネット世論を作り出している。そりゃそうだろう、たとえばおれの場合、大切な女性と大切なものを一度でも体験してきたら、その一点をもって「女はクソ」みたいなことはもう言えない。先輩にシバかれて、一度でも「あれで育ててもらった」ということがあれば、もう安易に「パワハラはクソ」とは言えなくなる。おれは商社マン時代にはサービス残業しかしたことがなく（残業代を請求したことがない）、残業しなかった日は一日もなかったけれど（夜間の通用口からしか退社したことがない）、さまざまな体験があって、すごい量のことを学んだ、だからそのときのことを「社畜」とは思わないし、今このときもその残業代は「要りません」と思っている。総額で新車の一台ぐらいは買えそうだけどね。もちろん世の中はそれだけではないだろうけれど、「そういうこともあるよ」とおれは話しているつもりだ。

そういったことのすべての体験は、おれにとって、価値があるという以上に何かが輝いている。なぜなのかはわからない。だからおれはそのことを、はずれようのないように「大切なもの」と言った。残業しても大切なものがなかったら確かにクソなのかもしれない。先輩にシバかれても大切なものがなければクソかもしれない。女性と交際しても大切なものがなければ、となるのかもな。でもおれは、もし大切なものに触れられなかったのならそもそも「話」をしないと思う。おれのする話は第一に「大切なもの」について、第二には、その大切なものとは「違う」ものについてだ。大切なものを拠点にしてしかおれは話をしない。

おれがここに話したことを、あなたはすてきな話だと思ってくれるかもしれないが、前もって断言しておく、おれのどんな話だって、ネット世論の場においたらズタズタに八つ裂きにされよう。どういう理由から八つ裂きにされるということではなく、もともと八つ裂きが目的で成り立っている場だ。代わりに八つ裂きにされない話でもしてみようか。たとえばおれは、まったく何の意味もないが円周率を百ケタまで覚えている。昔は百五十ケタまで覚えていたが今は自信がない。このことは八つ裂きにされないだろう。初めから不毛を承知でやっていることだからだ。

くだらないことをこそ称賛するという、もともとの「ネット」のノリもきらいじゃない。二十年以上前には、２ちゃんねるに入り浸っていた時期もあった。もともとのくだらないことの象徴として、一種の「祭り」に主要な役割として参加したこともある。だが当時のそれは成果などまったく見込まない怠惰の極みのような遊びで、一時的なユートピアやろうとしていたにすぎなかった。世論の形成に関わるなんてことはまったくありえなかった。

残念ながら今の「ネット」はそういうものじゃないな。ある意味、最もゆとりのない場所がネットになってしまった。手書きのマンガひとつ書いたところで、ファボを稼がなくてはならないし、批評を受けなくてはならないし、炎上を警戒しなくてはならないし、収益化を企まねばならなくなった。かつては単なるヒマ人の集まりだったものが、今は新しい「ギョーカイ」になってしまったのだろう。

あなたも含めた多くの人々に、ネット世論の影響というのは明らかにある。言うまでもないことか。かつて、十八歳が飲酒したからといって、誰がそんなことを騒ぎ立てただろう。おれが大学に入ってクラスメートと初めにやったことは当然飲み会だったぞ。高校生が煙草を吸っていたからといって大騒ぎするようなことか。おれの行っていた高校は、屋上に「禁煙」と張り紙がしてあったぞ笑。そして、張り紙をしても効果が無くて吸殻が投げ捨てられるので、あきらめて学校側が灰皿を設置したのだ。マジの話で、いちおう私立の進学校なんだぜ笑。中学のときは、教師が「煙草はともかく、シンナーはやめておきなさい」と真剣に言う感じだった。不良マンガが流行っていたし、尾崎豊が堂々と「校舎の裏、煙草をふかして、見つかれば逃げ場もない」と唄っていたぐらいだからな。

実際あなたの目の前で、高校生がこっそり煙草を吸っていたとしても、あなたは非常ベルを鳴らさないし、緊急事態のサイレンを鳴らしもしない。悪党としてその高校生の写真を街中に貼り出したりもしないだろう。つまりあなたは大騒ぎしない。でもネット上でその写真や動画を見かけたときは別だ。おかしなことだと思わないか。そのファイルが手軽に「拡散できる」ということじたいがトリガーになって大騒ぎを始めてしまう。

高校生が煙草を吸おうが、ボランティア活動をしようが、そのどちらが良いとも言えない。どちらであっても、「大切なもの」に触れた奴だけが世界を視る。けど、煙草を吸いながら得た友人なんかネット世論は認めないだろうし、ボランティア活動だって、千羽鶴を折った途端にゴミ扱いされるだろう、ネット世論とはそういうものだ。

というわけで紙面が尽きてしまった。ところでふつう「コラム」というと、この一ページのことをコラムって言うよね。こんな冊子全体をコラムって言わねえよな。またお会いしましょう。

2022 年 5 月 4 日　九折空也